

柏の歴史ある建物

柏市建造物調査報告書 4



柏市教育委員会

2021

柏の歴史ある建物

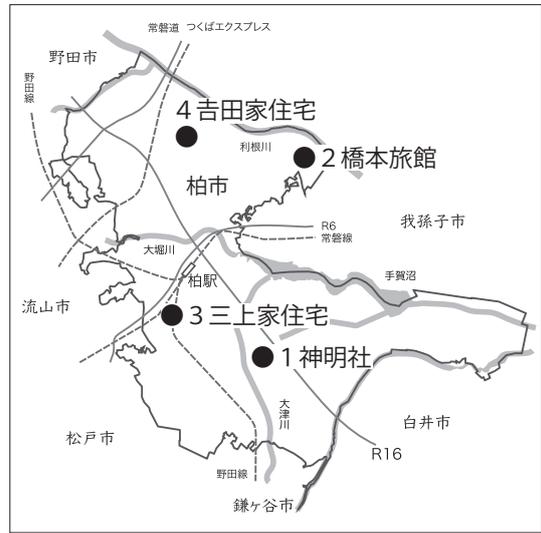
柏市建造物調査報告書 4

柏市教育委員会

2021



案内図 千葉県柏市



柏市内における対象の位置図 章番号と名称を示す

表紙写真 (右上から時計回りに) :

背景 橋本旅館 [1]

表紙 吉田家住宅室内 [2]・三上家住宅 [3]・神明社神楽面 / 猿田彦と狐 [4]・神明社本殿 [5]

裏表紙 橋本旅館平書院建具 [6]・吉田家住宅稲荷神社狐 [7]・神明社弁天社 [8]

表紙デザイン： 株式会社 精興社

写真撮影： [1-2] 江藤隆博、[3] もば建築文化研究所、[4] 柏市文化課、[5-8] 金出ミチル

例 言

1. 本書は、柏市教育委員会生涯学習部文化課（以下、「文化課」）が実施した建物調査の記録である。調査対象は、神社・旅館・近代住宅・農家と、多様な建築の分類からなる神明社・橋本旅館・三上家住宅主屋・吉田家住宅の4件である。
2. 文化課による各種調査の一環として原稿を作成し、本報告書の印刷・製本は令和3年度(2021)事業として文化課の市費による直営事業として実施した。
3. 各建物の調査概要、本文執筆及び写真撮影・図面・挿図作成の担当は下記のとおりである。この他、史料・写真・図面の出典及び所蔵・撮影、作成者（敬称略。所属は調査時。）については、それぞれキャプションに記す。本書の編集は金出ミチルが行った。

第1章 神明社

調査日：2019年2月7日（建物）、2019年12月8日（鳥居）

調査担当：金出ミチル（柏市文化財保護委員会）、江藤隆博（文化課）

調査協力：小河原博志、高野博夫（文化課）

1 神明社の歴史 [本文] 高野博夫

2-2 本殿の銚金物 [本文・挿図・写真] 江藤隆博

修理後の鳥居 (p32)、再建中の神楽殿 (p37) [写真] 江藤隆博

上記以外の本文及び図面・写真：金出ミチル

第2章 橋本旅館

調査日：2019年12月27日、2020年1月21日・2月5日、2021年2月5日・3月29日

調査担当：金出ミチル、市原徹（千葉市近現代を知る会）、江藤隆博

調査協力：小河原博志、高野博夫

1 布施の歴史 [本文] 高野博夫

建物外観 (p43-45)・瓦 (p50-51) [写真] 江藤隆博

瓦調査 (p50-51) [実測・拓本・トレース] 高松みき子、中田貴子、藤原明子、柳田真子（文化課）

瓦調査 (p50-51) [所見・観察表] 山崎吉弘（羽生市教育委員会生涯学習課）

上記以外の本文及び図面・写真：金出ミチル

第3章 三上家住宅

調査日：2014年8月28日・9月4日

調査担当：中村文美、海東壱子、高橋和誠、渡辺健二

1 南柏と三上家の歴史 [本文] 渡辺健二（文化課）

2-1 三上家住宅旧主屋概要 [本文] 中村文美（合同会社もば建築文化研究所）

2-2 三上家住宅旧主屋 [本文] 海東壱子（合同会社もば建築文化研究所）

図面：海東壱子、高橋和誠（ものつくり大学学生） 写真：中村文美

第4章 吉田家住宅

調査日：2020年3月3日・3月10日

調査担当：金出ミチル、市原徹、江藤隆博

調査協力：小河原博志、高野博夫

室内写真：江藤隆博

本文及び上記以外の図面と写真：金出ミチル

4. 掲載した図面はミリを単位とする。尺寸を用いる場合には特記する。
5. 調査及び本書の刊行に際して多くの方々のご協力、ご指導をいただきました。
ここに記して謝意を表します。(敬称略、五十音順)

柏市富勢地域ふるさと協議会 葛飾区郷土と天文の博物館 澤田瓦店(野田市) 神明社
市原徹 岩坂えり子 小峰園子 坂巻まり子 座間恒雄 谷口栄 星野保則
眞下和久 三上周史 三坂俊明 守康大 山崎吉弘 吉田竜也

参考文献

- ・ 神明社
『沼南町史 第一巻』沼南町役場、1979
『沼南風土記』沼南町、1981
『柏市自然環境調査報告書』NPO 法人かしわ環境ステーション、2019
- ・ 橋本旅館
柏市市史編さん委員会『柏市史 近世編』柏市教育委員会、1995
葛飾区郷土と天文の博物館『江戸・東京のやきもの』1~3、1999
眞下和久編集「富勢の人々 語り部 寺山橋本屋七代目に生まれた坂巻孝さんの体験談」柏市富勢地域ふるさと協議会発行、2006
柴又地域文化的景観調査委員会、葛飾区教育委員会『葛飾・柴又地域文化的景観調査報告書』2015
- ・ 三上家住宅
柏市市史編さん委員会『柏市史 近世編』柏市教育委員会、1995
柏市市史編さん委員会『柏市史 近代編』柏市教育委員会、2000
『歴史ガイドかしわ』柏市教育委員会、2007
『今谷上町のいまむかし』柏市図書館サービス充実支援実行委員会、2009

※ 本書は、柏市教育委員会の刊行する「柏市建造物調査報告書」の4冊目である。
今までの刊行物には通し番号は振っていないものの、下記3冊が該当する。

- 1 『旧吉田家住宅調査報告書』2008
- 2 『旧吉田家住宅保存修理工事報告書』2011
- 3 『空をつくる建物 高射砲第二連隊 照空予習室調査報告書』2018

目次

第1章 神明社

1 神明社の歴史	7
2 境内と建築	
2-1 境内	8
2-2 本殿	8
2-2-1 建物の特徴	17
2-2-2 鋳金物	23
3 石鳥居	29

第2章 橋本旅館

1 布施の歴史	39
2 橋本旅館	
2-1 概要	39
2-2 建物の特徴	48
2-3 平面の変遷	55

第3章 三上家住宅

1 南柏と三上家の歴史	65
2 三上家住宅旧主屋	
2-1 概要	66
2-2 旧主屋	
2-2-1 構造形式	67
2-2-2 変遷	77

第4章 吉田家住宅

1 はじめに	85
2 建物の特徴	
2-1 概要	87
2-2 平面	87
2-3 小屋組	98
3 変遷と復原考察	
3-1 昭和の改修	99
3-1-1 茅葺から棧瓦葺へ	101
3-1-2 平面の改造	101

第1章 神明社

所在地：千葉県柏市塚崎 1460

建築時期：享保 18 年（1733）[本殿]

1 神明社の歴史

塚崎地区の神明社は、かつては風早村の村社に指定された神社で、大津川の中流右岸、藤心地区に対する丘の上に鎮座する。境内は鬱蒼とした森に包まれ、昭和 52 年に「町民の森」（現在は、「沼南の森」）に指定され一般に開放されている。

神明社の創建については、当時の資料が残されていないため不明であるが、『千葉県東葛飾郡誌』（大正 12 年発行）に「創建の年不詳なりと雖も徳治嘉元の間にあるものの如く、」と、鎌倉時代の年号が登場。『下総国旧事考』（明治 38 年発行）には「塚崎明神社。土人、神明と称す。神鳳抄に云う、二所太神宮御領、下総国相馬云々、祠官守氏社人四名…」とあり、古来より近郷近在の人々の信仰を集めてきた古社である。

社殿は、伊勢神宮・八幡社、春日社の三社を祀る典型的な三社神明造りで、伊勢神宮の方向を向いており、平安時代、この地に置かれた伊勢神宮の^{みくりや}荘園、相馬御厨と密接な関係があったといわれている。神明社の鎮座する大津川流域は、相馬郡では最大級の谷津田として稲作が行われ、大井・戸張・増尾・高柳などの村々が営まれてきた。室町時代の「本土寺過去帳」には嘉吉 3 年（1443）の年紀のある人物に、「ツカサキ」という地名がみられる。

天正 18 年（1590）関東を付与され江戸城に入った徳川家康は、翌 19 年、領内の主な寺社に朱印状を与え、所領を安堵する。神明社もこの時、社領十石の朱印状を受け、明治維新まで維持された。近世初期幕府領であった塚崎村は、元禄 11 年（1698）本多正永の所領となる。本多氏はその後、駿河田中藩に移封されるが、下総領地一万石、四二ヶ村は先祖からの領地として残された。本多氏の神明社に対する崇敬は厚く、宝暦 7 年（1757）には、七代目領主本多^{まさよし}正珍が石鳥居〔市指定有形文化財〕を寄進。形は伊勢神宮外宮鳥居に似ているが、円柱にはやや転びがあり、掘立形ではない。田中藩は、船戸と藤心に下総領支配の陣屋を設けたが、藤心陣屋の代官も、宮司に苗字帯刀を許すなどの待遇を与えている。

境内には、三社殿をはじめとして拝殿・神楽殿・^{とぼりや}幄舎等多くの社や石祠があるが、石造物の中で鳥居とともに注目されるのが社殿に向かって左手の御手洗石。寛文 9 年（1669）、氏子たちが庚申待成就のために奉納したもので、彫法は素朴、市内最古の端正な姿を見せている。10 月 17 日が例大祭で、表参道脇には文化 4 年（1807）塚崎村若者中の奉納による、全長 16 メートルの 2 本の^{のぼりはた}幟幡が掲げられた。風早村社の頃には、村の予算に神社費が計上され、垂纓冠に神事装束の村長が幣帛料を捧げ、今日でも近隣の藤ヶ谷・藤心の村々から「オゴゼン」と称する神饌が奉納されている。神楽殿では十二座神楽〔市指定無形民俗文化財〕が上演奉納される。神楽の構成は、古代神話をもとにした神楽舞を中心とするもので^{みこ}巫女・^{さるたひこ}猿田彦・湯笹・^{えびす}狐・^{あまのうずめ}恵比須・餅投げ・^{しょうき}鐘馗・玉取り・^{あまのうずめ}天宇受女命・^{みこと}大幣・^{おおへい}大蛇退治・^{おろち}天岩戸という十二の舞曲からなる。しかし、後継者の少ないことや時間などの

制約で十二の演目すべてが奉納されることはなくなっている。

2 境内と建築

2-1 境内

境内は、伊勢神宮に向く南西方向に走る軸線を中心として、鳥居・拝殿・本殿が一直線上に配置されている。神明社の立つ土地は、昔から安定した場所として知られ、「はに」と呼ばれてきた。すなわち地面は、雨が降ると柔らかくなるものの、乾くと固くなる性質で、東日本大震災時にも大きな被害がなく済んだとのことである。

灯籠が両脇に並ぶ緩やかな勾配の石段を登った先に、宝暦7年（1757）の銘のある神明造の石鳥居が立つ。参道の東側には社務所〔当初は幄舎（とぼりや）として大正4年（1915）築〕と神楽殿〔2021年再建〕、突き当たりに拝殿〔明治8年（1875）築、2013年改築〕が位置する。この奥に瑞垣に囲まれた本殿が3棟並ぶ。

本殿を社社の中心に据え、境内の他の建物については、第二次世界大戦前までに多くを改築、近年には拝殿を改装し、お籠もり殿と神楽殿を建て替えるなど、時代の変遷とともに境内地内で建物を更新しながらも、社社の最も神聖な場所である本殿は古来のまま、大きく改変されることもなく、継承されてきたのである。

2-2 本殿

神明社の本殿は3棟からなり、瑞垣内中央に「御正殿」、向かって右に「八幡社」、同左に「春日社」の社殿が並んで立つ。それぞれの祭神は、天照大神、応神天皇、武甕槌神^{たけみかづちのかみ}である。このように三社殿が並ぶのは、「三社託宣^{たくせん}」という思想を体現する形式であるという。御正殿内宮殿の屋根の中に保管されている棟札より、これらの建物は享保18年（1733）の建築時期が裏づけられる。

白木からなる高床式、切妻造平入、茅葺の神明社本殿三社殿は、伊勢神宮の社殿を規範とする神明造に分類することができる。厳密には、独立した棟持ち柱のある御正殿のみが神明造に近いながらも、社殿本体を指す身舎の梁間は1間で、棟通りに柱がない。

国の重要文化財に指定されている高床式の神明造本殿として、仁科神明宮本殿（長野県、江戸時代中期築）や神明社本殿（長野県、序貞元年〔1684〕築）が広く知られ、近年の指定では茨城県筑西市の内外大神宮の内宮本殿と外宮本殿（延宝7年〔1679〕築）が挙げられる。文化庁の主導により1972年から実施された各都道府県の近世社寺建築緊急調査の対象になった神社のうち、神明造は少数派である。近代に入り第二次世界大戦敗戦前までは国粋主義を体現する神社建築として、多くの招魂社、後に護国神社に神明造が採用されたことは対象的である。

神明社の本殿三社殿が建てられた江戸時代中期には、今までにない建築を造りあげるために意匠及び技法上様々な試みがなされ、神社建築においても飛躍的な展開が見られた。このような背景の中、伊勢神宮と深い繋がりのある神明社では、当時日本の神社建築の原点ともいえる骨太な神明造の社殿を建てることを選び、緑豊かな社叢の中で地域社会とともに300年近い年月まもり続けている。

神明社 年表

大治 5年(1130)	平経繁相馬郡布施郷を伊勢皇大神宮に寄進
延文 5年(1360)	南北朝時代に編さんされた『神鳳鈔』に 「相馬御厨、大神宮御領、蓋謂此也、祠官守氏、社領十石」の記述
天正 19年(1591)	徳川家康から社領十石の朱印を受ける
享保 18年(1733)	本殿三社を再建 [棟札銘]
宝暦 3年(1753)	藤心村氏子、表参道石段を奉納
同 7年(1757)	2月 本多伯耆守正珍、石鳥居を奉納 [陰刻] 3月 石段の下に弁財天を奉納 6月 本多伯耆守正珍、吉宗七回忌法要を惣奉行としてとりおこなう 7月 本多伯耆守正珍の長男正堅早逝
天保 5年(1834)	近隣諸村の氏子、崇敬者、拝殿前に石垣を奉納
明治 4年(1871)	神明社官地とされ国に召し上げ
8年(1875)	拝殿の再建
34年(1901)	民有地に復す 境内の再整備開始
35年(1902)	神楽殿の再建
39年(1906)	風早村社に指定
大正 4年(1915)	^{とぼりや} 幄舎(現社務所)建設
昭和 32年(1957)	本殿三社、拝殿、神楽殿の茅葺屋根を鉄板で覆う
平成 17年(2005)	境内のお籠もり殿の再建
20年(2008)	石段の改修
23年(2011)	駐車場の整備
25年(2013)	拝殿の改築、幣殿と参集殿の増築
31年(2019)	石鳥居修理、神楽殿解体
令和 3年(2021)	神楽殿再建



境内配置図 S=1/1000

柏市都市計画図を加工、加筆



伊勢神宮の方角に軸線をそろえた参道から神社境内を望む。



弁天池と弁天社





南から見る 春日社・御正殿・八幡社



西から見る 春日社・御正殿・八幡社

御正殿



側面を見上げる



背側面

御正殿



正面



背側面



側面

八幡社



全景



妻を含む側面



正面扉廻り



木階



側面



全景



正面扉廻り



妻詳細



背側面

2-2-1 建物の特徴

ここでは便宜的に本殿正面を南面とし、以降の説明にはこの方位を用いる。また、境内にある本殿以外の建物及び石造物などについては、章末に掲載する。

構造形式

3社とも、間口1間、奥行1間、切妻造、茅葺、平入とし、正面に木階を設ける。中央に据えられた御正殿の規模は両脇の八幡社（東側）と春日社（西側）より一回り大きい。

柱・小屋組・床・天井・壁

円柱からなる隅柱の内部の角は丸く加工せず、角を立てたままである。外部に、腰長押と内法長押を廻す。柱の上に梁を架け渡し、桁をのせる。

妻は^{いのこさす}豕扱首、板壁とする。妻壁の室内側には棟束のみを立て、御正殿においては外部では妻壁より伸ばした棟木を角柱の棟持ち柱で受け、破風板の^{くらかけ}拝み寄りにそれぞれ4本ずつ^{くらかけ}鞭懸を差す。

棟木から桁に化粧垂木を流し、間に母屋はない。両側面と背面は、厚板（25ミリ厚）の横板を柱の板じゃくりで落とし込んだ板壁とする。床は床板敷き、天井は張らない。

建具

正面に両開きの板戸を建て込む。戸は四方に幅広の框を廻し、鏡板を嵌める。両脇に小脇板、戸は方立てに蝶番で留め付け、向かって右の戸の召し合わせ近くの落としの鍵で戸締まりする。

各建物の板戸外側には、全棟に共通する現在の鉄製銚金物以外の金物が取り付けられた痕跡が風蝕差及び止め釘穴として残り、扉により一定ではないものの数代分確認できる。以前のものは銅製でおおかた現状より小さく、止め釘の本数も少ないことから、風であおられて破損したのちに取り替えられてきたことが推測される。（銚金物の変遷に関する調査は2-2-2で報告。）

縁廻り

御正殿には正面と両側面の3面に切目縁が廻されている。高欄が取り付け、正面中央両脇に親柱が立つ。親柱の銅製擬宝珠に陰刻などの銘はない。八幡社・春日社は正面にのみ切目縁が設けられ、高欄はない。

八幡社のみで確認したところ、最下段の両脇に^{ほぞあな}柄穴のある礎石が据えられ、この位置で土台が前方に継がれているので、かつては木階の下端にも親柱が立っていた、あるいは立てられるように設計されていることが考えられる。御正殿の縁には高欄があるのでこのように推測できるが、他の建物の縁

三社殿の形式の比較

	御正殿	八幡社・春日社
規模	桁行1間×梁間1間 間口6.2尺×奥行5.2尺	桁行1間×梁間1間 間口5.8尺×奥行4.8尺
鯉木	6本	5本
縁	正面と両側面、高欄付	正面のみ、高欄なし
棟持ち柱	あり、角柱	なし

は正面だけにあり高欄がない。現在階段の一番下の段には石材が用いられていることから、この範囲は風雨に晒されて傷みやすい状況にあったため、材質が変更されたことがうかがえる。

貫で繋ぐ縁束がのる正方形の礎石は比較的大きく、本殿の柱下の礎石と同じ大きさである。

身舎の床下は、周囲を縦板張りにして閉鎖されている。

屋根

茅葺の屋根は昭和 30 年代年に鉄板で覆われ、表面は赤色のペンキ塗とし、今までに 2 度塗り直しされている。大棟の上には千木と鯉木がのる。鯉木の本数は、御正殿が 6 本、八幡社と春日社がそれぞれ 5 本と規模に応じて変えられている。これらも金属板で覆われている。

軒廻り

化粧垂木に反りはなく、先端に鋳金物を取り付く。いずれの建物でも化粧垂木の支割は、間口 1 間を 6 等分した値とする。茅負・裏甲もまっすぐである。茅負正面両端に八双金物がとりつく。

外構

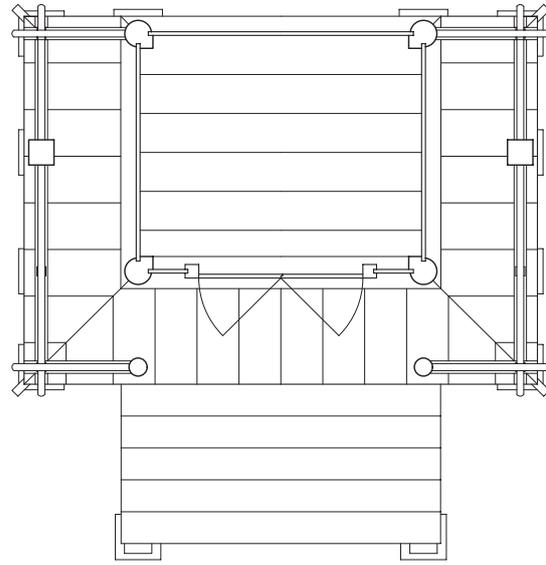
黒色の瑞垣が 3 棟の本殿の周囲を囲み、背面中央に門を設ける。各本殿の正面を石敷きで繋ぎ、周囲を白い玉石敷きとする（玉石は 10 年前に敷設）。



本殿前石畳



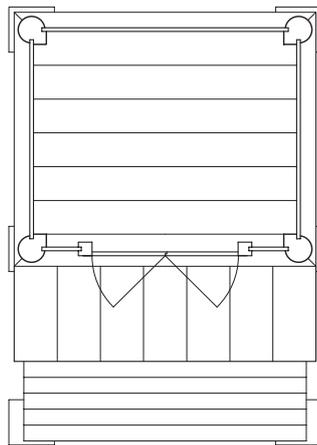
瑞垣と門



636 1,879 636

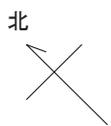
1,576
636
1,170

神明社 御正殿
平面図 s=1/50



1,757

1,454
1,151



神明社 春日社・八幡社
平面図 s=1/50

御正殿



屋根裏見上げ



内部の隅を見上げる。隅は丸柱に加工されていない。



正面の扉を開けた状態



縁詳細



縁高欄架木(ほこぎ)交差部の
銚金物



縁高欄親柱の擬宝珠

御正殿

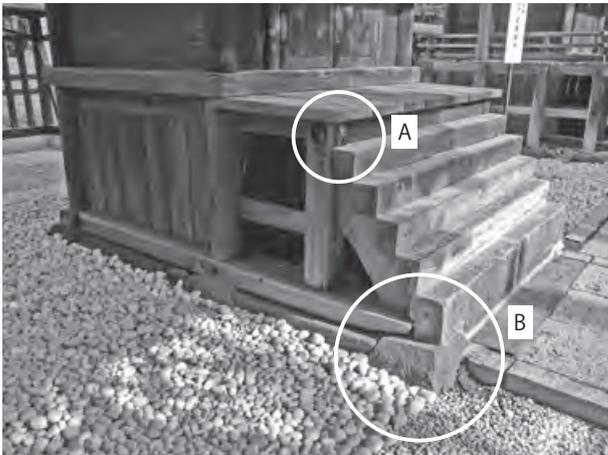


縁束は大きな礎石にのる。

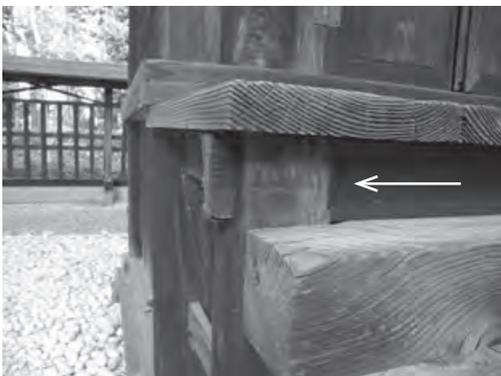


木階最下段は石材からなる。
この下に礎石がある。

春日社



縁廻り痕跡



A 縁束には現状と異なる位置に風蝕痕があり、
木階の納まりの旧状を示す。



B 木階最下段（石製）の礎石天端には
ホゾ穴がある、手摺りの親柱が立っていたのか。

2-2-2 鋳金物

本殿三社殿ともに、扉には現在の鋳金物・蝶番のほかに、過去にあった鋳金物・蝶番の形状を木材の風蝕差や日焼けの痕跡が目視でも確認できた。金物の止め釘穴の一部には抜き取られなかった釘が残されていた（写真 2~4, 7, 8）。これらの痕跡を形状や扉上の位置、さらに痕跡の重なる順番から鋳金物を A~D の 4 種類、蝶番を a~c の 3 種類に分類、足跡を写し取り、図示した（図 1~4, 7）。

これらの金物の痕跡は重なり合い、同時期に建築された三社である程度の規則性が見られた。また、金物の材質も銅製から鉄製へと変遷することが確認できたことから、複数期にわたり金物が取り替えられたことがわかる。

過去（Ⅰ～Ⅲ期）の鋳金物・蝶番の痕跡

鋳金物 A の形状は、中でももっとも装飾性が高く、精巧な意匠である（図 3）。鋳金物 B・C 及び鍵穴周りの鋳金物 D は止め釘穴及び釘が観察できるため（写真 3~5）、何らかの鋳金物が取り付けられていたことは確認できるが、その形状は不明である。鋳金物 A・B・D は残された釘が銅製であることから（写真 2~4）、金物自体も銅製であったと想定した。

蝶番 a は、扉側に 2 段の円弧状の切り込み、柱側に 1 段の円弧状の切り込みが入る形状で、釘穴は柱側に 4 個、扉側に 7 個穿たれる。蝶番 b は、扉側の先端に 1 段の円弧状の切り込みが入り、柱側は隅丸の方形である。釘穴は柱側に 4 個、扉側に 5 個穿孔される。蝶番 c の形状は、単純な隅丸方形で、柱側と扉側にそれぞれサイコロの五の目のように釘穴が開けられている（図 1）。残された釘の地金から、蝶番 a・b は銅製、蝶番 c は鉄製であると想定できる。

現在（Ⅳ期）の鋳金物・蝶番

三社ともに同規格の鋳金具及び蝶番が取り付けられている。地金はいずれも鉄製である。蝶番には四隅に円弧状の切り込みが入り、円を利用した猪の目の透かしが穿たれている（図 2）。鋳金物には猪の目の透かしのほか、円形のもの、円形を組み合わせたもの、円形と直線を組み合わせた透かしが見られる（図 4）。これらの金物の透かし及び釘穴は、それぞれ個々に微妙なズレがあるため鋳造品ではないと思われる。

蝶番は左右対称に 3 個ずつ取り付けられ、中央の蝶番及び鋳金物は、扉の中央に揃えて取り付けられている（図 5）。

鋳金物・蝶番の変遷

金物の形状や地金の種類から、少なくともⅣ期にわたり変遷すると考えた。それぞれの実年代は、当初のⅠ期（享保 18 年 [1733]）の建築年代以外は不明であるが、年表にあるように、神社の整備や改修が不定期に行われており、このいずれかの整備・改修時期と金物の取り替え時期が符合するであろうと推測する。

変遷は、銅製の金物が取り付く時期と、鉄製のものが取り付く時期の大きく 2 時期に分け、更に蝶

番の種類や組み合わせから、それぞれ2小期に分け合計4時期に変遷図を作成したところ以下の傾向が読み取れる。①地金が銅製のものから鉄製のものへ、②形状は意匠を凝らしたものから、単純なものへと変わっていった（図6及び下記）。

各時期の構成

【I期】

銚金物A・B・Dに銅製の釘が確認できる。当初の装飾が一番華美であったろうと推測し、社殿には当初建築時より銚金物が全て取り付けいていたと想定した。蝶番aは春日社のみ上段と下段に確認できるが、ほか二社は下段のみである。蝶番の組み合わせの根拠についても乏しいが、I期～III期は蝶番が4個ずつ取り付けいていたと想定し、春日社は蝶番aが2個ずつ上下段に、蝶番bが2個ずつ内側に取り付けいていたと想定した。ほか二社は蝶番aが最下段に1個ずつ、その上に蝶番bが3個ずつ取り付けいていたのであろう。

【II期】

銚金物A～DはI期のものが全て取り付けいていたと想定する。蝶番は全てbに取り替えられたと考えられ、I期とII期の違いは蝶番aがbに取り替えられただけである。このため、I期とII期の時代差はさほど大きくないと思われる。

【III期】

銅製の蝶番bが鉄製の蝶番cに全て取り替えられる。銅製の銚金物B・C・Dもこの段階では取り付けしていない可能性がある。その代わりに銚金物Aが鉄製のものに取り替えられた可能性があるが、現状ではその痕跡は確認できない。現在の鉄製金物の内側に痕跡が残っている可能性があるが、現状ではその痕跡は確認できない。

また、木材の風化差、色調差は金物が取り付けいていた時間差を示すと考えられ、風化が少なく、色調の薄さが顕著であるものが蝶番cであることから、蝶番cの取り付けいていたIII期の期間がもっとも長かったであろうと想定できる。このほかの金物については、さほど差を感じられず、金物が取り付けいていた期間もほぼ同期間であったと考えられる。

【IV期】

現在の鉄製の銚金物、蝶番。

鍔金物

図1 蝶番痕跡 a ~ c < I期 ~ III期 >

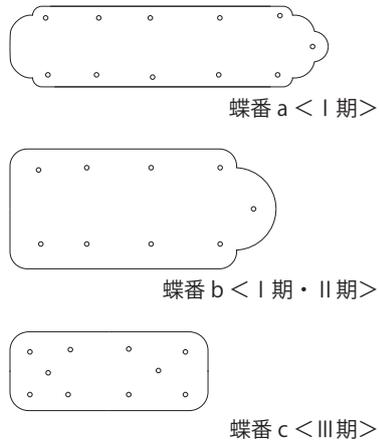


図2 蝶番 < IV期 >

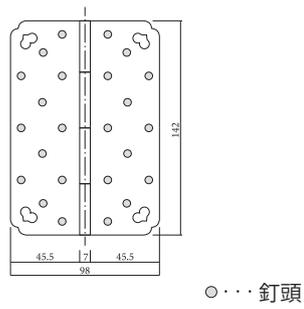


図3 鍔金物痕跡 A < I期・II期 >

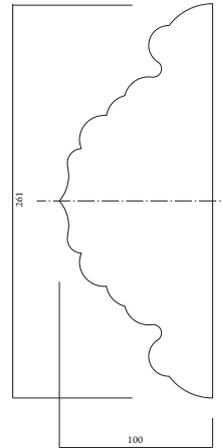
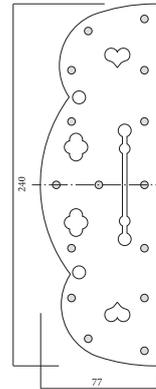
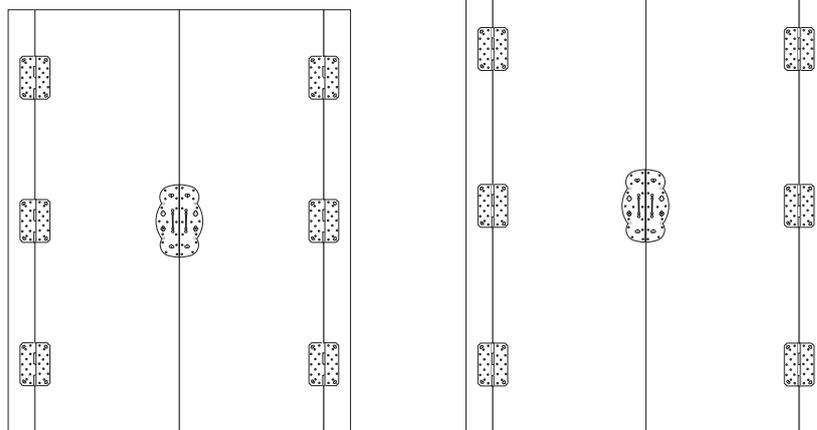


図4 鍔金物 < IV期 >



s=1/5

図5 鍔金物・蝶番取付位置 < IV期 > (右: 御正殿、左: 春日社、八幡社)



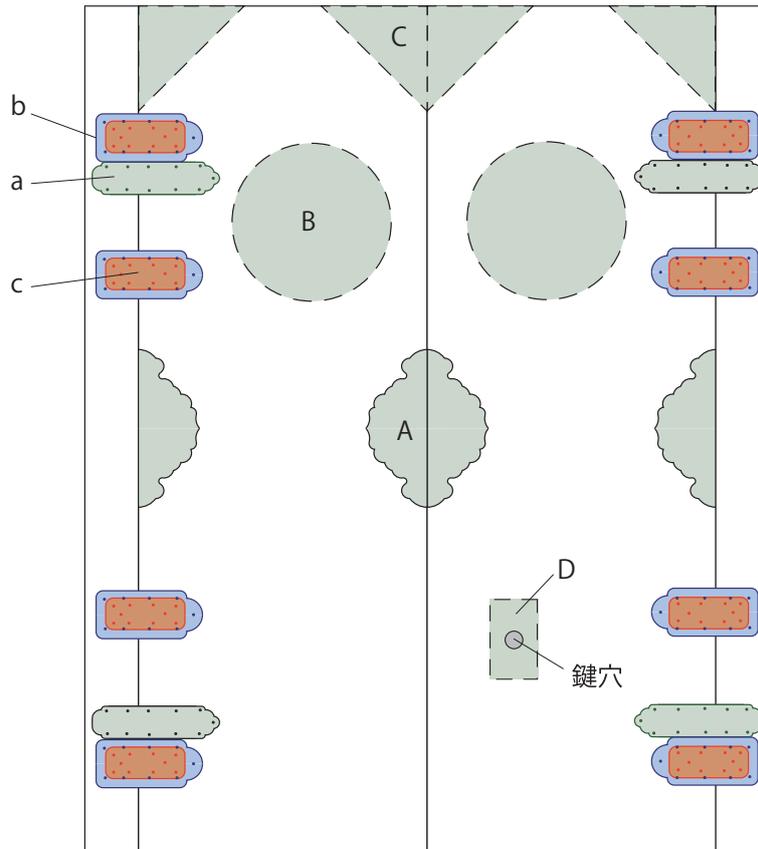
s=1/25

	春日社	御正殿	八幡社	地金
I 期 (当初)				銅
II 期				
III 期				鉄
IV 期 (現在)				

図6 扉変遷図（御正殿と春日社・八幡社の扉は寸法が異なっているが、模式的に同寸法で示した。）

* 図中破線は何らかの金物があったと想定されるが形状が分からないものを示した。

図7 銑金物痕跡 (A~D) 及び蝶番痕跡 (a~c) と取付位置



* 蝶番 a の上段の痕跡は春日社以外は確認出来ていない。

* 図中破線は何らかの金物があったと想定されるが形状が分からないものを示した。

凡例 ▼...釘 ▽...釘穴



写真1 扉に残された痕跡全体像
<春日社>



写真2 銑金物 A の痕跡と銅製釘、
釘穴<春日社>



写真3 銑金物 D の銅製釘と釘
穴<春日社>

凡例 ▼···釘 ▽···釘穴



写真4 銹金物 B の銅製釘と釘穴<春日社>



写真5 銹金物 C の釘穴<春日社>



写真6 蝶番 a~c の痕跡<春日社>



写真7 蝶番 a~c の痕跡と蝶番 c の鉄製釘<御正殿>

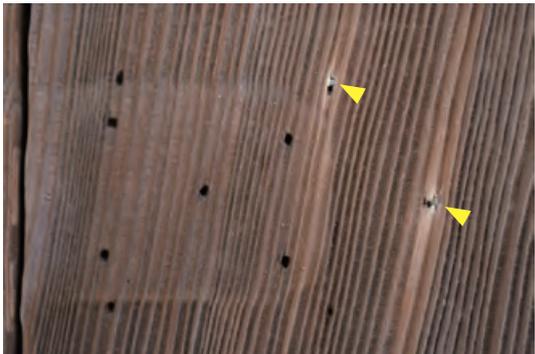


写真8 蝶番 b の銅製釘<春日社>



写真9 現在の蝶番<春日社>



写真10
現在の扉中央銹金物
<春日社>



写真11
現在の前扉
<御正殿>

3 石鳥居

柏市指定文化財神明社石鳥居の礎石の不同沈下に伴う鳥居本体の傾きが確認されたため、2019年度に柏市の補助事業として修理が実施されることとなった。石鳥居の修理に先立ち、柏市文化財保護委員会に、以下の通り、文化財の状況が報告された：経年により向かって右の柱が沈下し、傾きが緩くなっている。柱の沈下を是正するためには、基礎石を掘り起こして安定させる地業が必要となる。従って、神社側では高い位置にある方の鳥居の石材を足元で切り縮める修理方法も考えている。

これに対して同委員会からは、基礎を削掘する工事によって江戸時代中期に実施された地業の一部が失われる。現在低くなった柱の下に飼い物をいれて高さを調整し、笠木のずれをなくす方法を検討して欲しい。さらには貫の高さも水平となるので、柱を加工せずに施工できる。既存の石材に刃物を入れることなく施工できる方法を選びたいとの提案をした結果、事業主と施工者の理解を得て、修理が行われた。幸い鳥居の基礎地業が比較的単純であったために、地中の石材を加工しなくとも、不陸の是正を実施できる状況にあった。



石鳥居札発見状況
御正殿東妻の束に釘打ち止め



石鳥居札 宝暦7年(1757)
裏面には墨書なし
高さ(全長)494ミリ、下端幅111ミリ、厚さ7ミリ
肩幅113ミリ、肩高さ14ミリ

寄進札墨書書き下し

奉寄進神明宮石鳥居点火泰平國土安全
三月大吉日
宝暦七 丁丑歳
神主 守大隅守
願主 吉田共藏
同 清宮長兵衛
本多伯耆守
敬白

石鳥居



石鳥居 (2019年2月撮影、修理前)



石鳥居 陰刻と書き下し

西柱

寶曆七年丁丑二月日
執政中大夫拾遺伯州刺史藤原正珍依為舊領采地謹建焉



東柱

下總國相馬郡塚崎村
神明宮 石華表



1 鳥居に足場を架けて、参拝者を矢印の方向に迂回。



2 根石を吊り上げる。



3 【工事対象】正面向かって右側の柱の沓石と周囲のコンクリートを撤去した状態。根石が現れた。左右の柱を繋ぐ地中梁のような構造はない。(画面左下が鳥居の中心の向き)



4 根石の下に地業はなく、地山となる「はに」土の上に直にのる。周囲の樹木の根が育って根石の下に入り込み、石は約30ミリ持ち上げられていた。



5 クレーンで根石を吊り上げて、この下の地面の状況を確認。



6 根石の据え直しは、柱の傾きが左に揃うように外側に40ミリ移動し、木の根により持ち上げられていた分低くした。地面をすきとり、タコでそっと叩きながら調整。

石鳥居



修理後の鳥居 正面



修理後の鳥居 背面

手水鉢・天水桶・井戸筒



手水鉢 1
寛文9年 (1669)
柏市指定文化財
「神明社手洗鉢」

〔陰刻書き下し〕
敬白 信心旦那
奉納庚申待成就
寛文九己酉年 御神前手水鉢
(背面)
御神楽衆



手水鉢 2
安永2年 (1773)

〔陰刻書き下し〕
大々構中
安永二癸巳年
二月七日



拝殿前の天水桶
コンクリート製。側面に「国威宣揚」「武運長久」などの文字が見られる。第二次世界大戦時に金属製の桶を供出した後に奉納されたものか。



井戸筒 昭和34年 (1959)
コンクリート製、外形90センチ、厚さ7センチ、高さ60センチの管を重ねる。水面は7メートル以上地面より下方にあり、弁天池の湧水と同じ地下水に続くと思われる。



社務所／旧幄舎（とぼりや） 大正4年（1915）築
社務所となる前は、神楽見学のために遠方から来る参拝者にお膳を提供する場として利用された。
地域の村社までを含む神社の神職達が集まり、ここでもてなしを受けた。
建物は御大典記念時の幄舎としてモミ材で建てられた。

※以降、各建物の建築時期は、『沼南風土記』沼南町、1981に基づく。



鳥居から拝殿を見る。現社務所（画面右）の柱間は開放されており、神楽見学者をもてなすのに利用されていた。
撮影時期不明
[市教委蔵]

拝殿



拝殿
2013年再建
旧拝殿の部材を一部再利用



拝殿背面に設けられた幣殿
ガラス窓から本殿三社を拝める



旧拝殿
明治8年(1875)築
唐破風の向拝、屋根に千木と鯉木をのせる
(上) 昭和期(屋根を鉄板で覆った昭和32年以降)
守喜久男撮影
(左) 昭和期 茅葺屋根
[両者共市教委蔵]

神楽殿



旧神楽殿

明治35年[1902]築、2019年建て替えのために取り壊し。
6本の柱で茅葺屋根を支える、四方が開放された建物である。
毎年10月の祭礼時に神楽の舞台となる。「十二座神楽」は、
柏市指定無形文化財。

2011年3月の東日本大震災時に北西の柱が縦方向に破断し、
床下に補強が施されていた。地震時には固く締まった屋根が形
を保ったまま大きく揺さぶられたため、柱に直接負荷がかかり、
折損した。



旧神楽殿床下 強固な床組が舞台を支える



旧神楽殿
撮影時期不明
[市教委蔵]



解体中の前身神楽殿（2019年11月）



前身神楽殿の軒・天井廻り



再建中の新神楽殿（2021年3月）



新神楽殿には、前身建物の部材が一部再利用された。

境内



お籠もり殿

境内



沼南の森として、緑豊かな境内地の樹林を開放。社叢は、柏市となる前の沼南町時代から町民の森に指定されていた。多種多様な樹木が生い茂り、小動物・鳥・虫などの生物のすみかとなっている。



神明社の社叢を上空西から見る 1978年撮影
中央に見える大きな屋根は拝殿 [市教委蔵]

第2章 橋本旅館

所在地：千葉県柏市布施 1612

建築時期：昭和初期

1 布施の歴史

江戸時代以前から布施地区には、常陸方面へ向かう「七里ヶ渡」と呼ばれる渡し場があり、多くの人々が往来していたと考えられている。この道は、元和2年（1616）幕府が治安維持のため定船場と定めた重要な渡し場であった。利根川東遷によって流路が変わり、関東の流通路が整備されるにつれ、流山を經由して江戸への物資輸送路の荷上場として、布施河岸が成立する。布施村は多くの石高を有する柏市内最大の集落へと変貌を遂げていくが、こうした中、往来する人々の信仰を集めたのが布施弁天東海寺である。祈願寺として領主の庇護を受け、名主らの協力を得て桜山を整備し、幾多の俳人たちが訪れるなど繁栄を極めていった。村人たちは農作業の合間に、参拝客相手に菓子や軽食を提供し、草履とわらじの店を並べていくが、橋本旅館が創業したのはこの頃、天保年間である。

2 橋本旅館

2-1 概要

柏駅から花野井方面に至るバス通りから北に折れて、布施弁天通りに入る。布施の集落を構成する屋敷地がこの道沿いに並び、奥まで進んだ先に橋本旅館の建物が立つ。利根川に近い土地は今までに幾度も洪水の被害に遭い、大正3年（1914）には堤防が決壊した。橋本旅館でも2階の窓から舟で外に出たほどであり、旅館はこの水害後の昭和初期に建て替えられた。現在の大きな建物の新築にあたって当時千円の費用を要したことから「千両普請」と呼ばれ、東京神田の人から二百円借りて、一割ずつ返した「証文」があると言う。

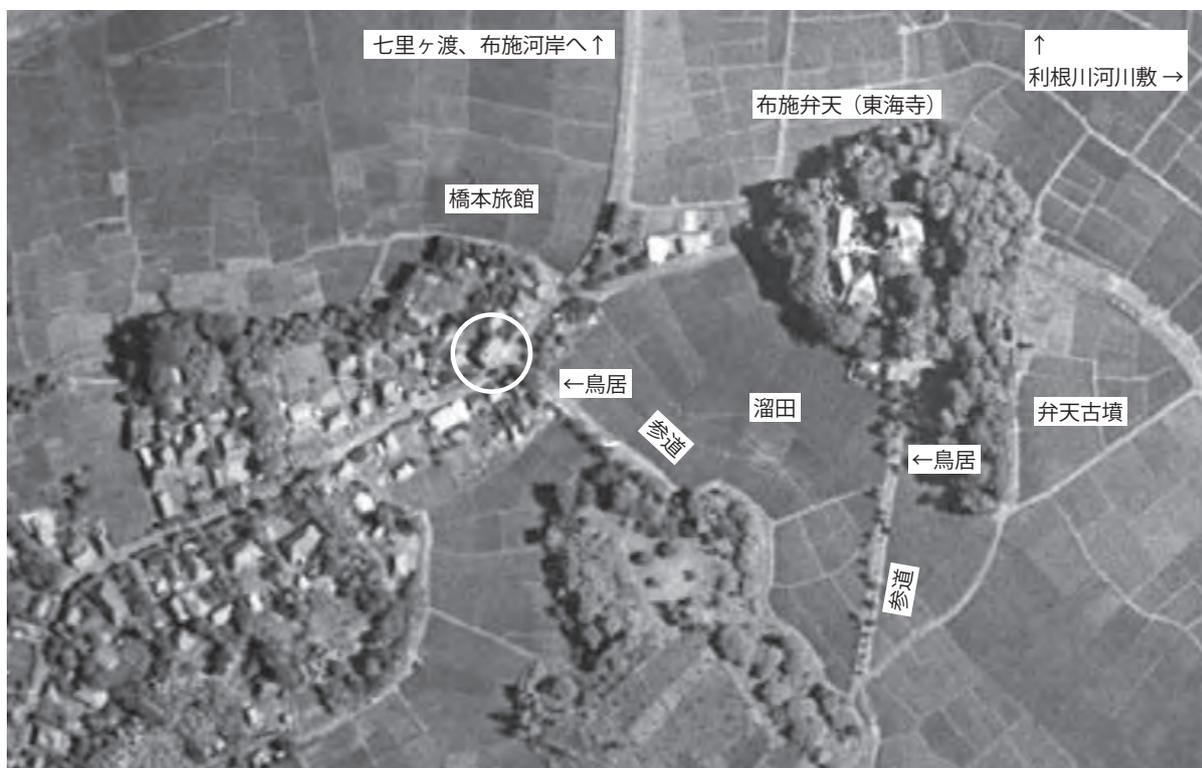
かつては旅籠や土産物店が軒を並べた通りの建物は代々更新されてきたものの、往時のまちの雰囲気は今日も感じられる。中でも橋本旅館は、通りが曲線を描いて突き出すところにあり、緩やかな坂を下りて寺山下地区に近づく者の前にその姿をあらわす。重厚な棧瓦葺の屋根をのせた堂々とした木造2階建のかもしだす存在感より、地域のランドマークとなっている。

布施の溜田 旅館や茶屋が立ち並んだ布施弁天の門前町として、布施は昔から大勢の参拝者で賑わいながらも、参道沿いの景観を捉えた史料は数少ない。「溜田^{ためだ}」とは、稲作の終わった冬場に雨水を溜めておく傾斜地上方の田んぼで、田植えの頃にここから下方に水を送る。この地域で上沼や下沼と呼ぶ名称の「沼」はこの溜田を指し、このあたりでは周囲の田畑などの位置を示すよりどころとなっていた。農地が住宅地へと変えられていった昭和時代後半より徐々に田畑の埋め立てが始まり、日本庭園（1986）やあけぼの山農業公園（1994）が誕生したことで、溜田は姿を消した。[p40 参照]



古写真1 布施弁天参道越しに見る橋本旅館付近 撮影時期不明 『歴史アルバム柏』(1984)所収 [市教委蔵]

- ・画面手前に溜田、さらには旅館の前から東に延びる参道が写り込んでいることから、建物は画面左が前身の橋本旅館。
- ・中央に常陸屋（魚店）、その隣は土産店と思われる。
- ・旅館の屋根は切妻造で建物の間口は5間半か。現在の建物は入母屋造、間口は7間。



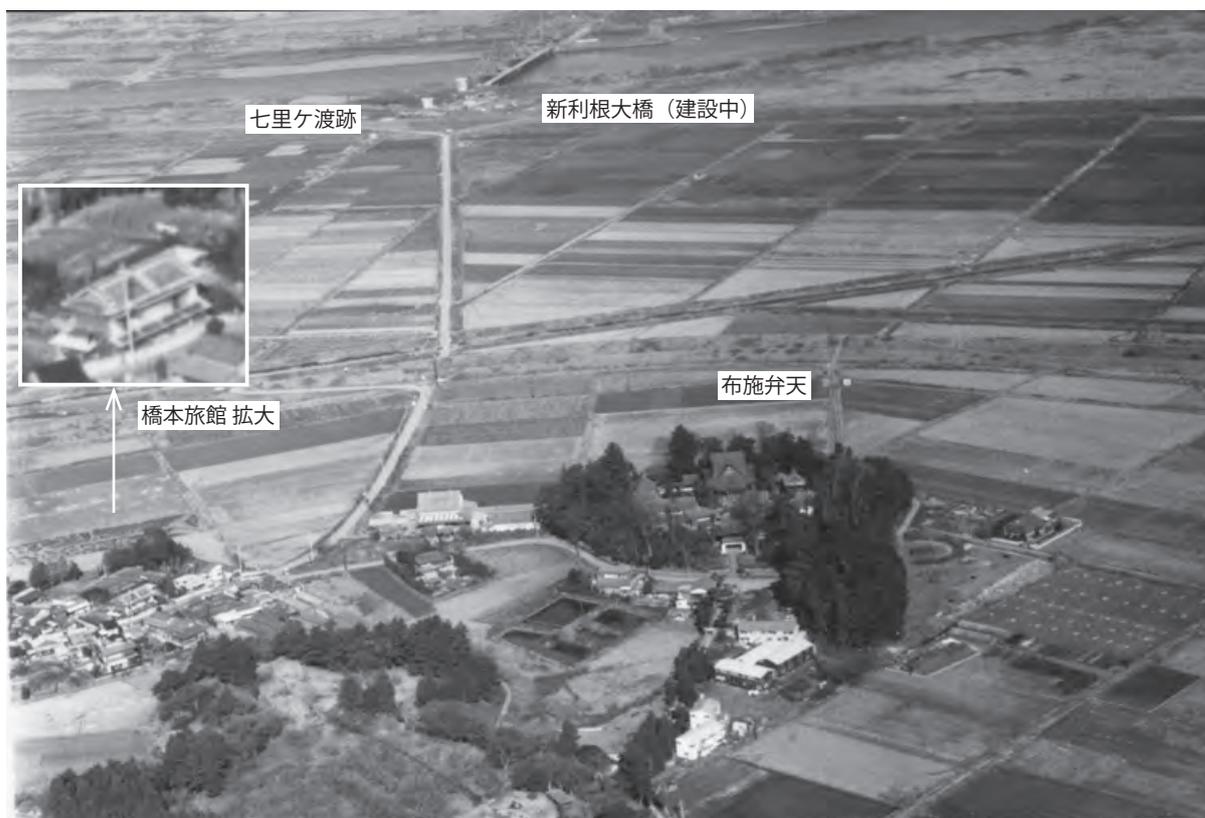
古写真2 布施 1948年7月撮影 国土地理院上空写真 (USA R1585 71) を加工 橋本旅館を○で示す。

- ・布施弁天の参道は、橋本旅館前の鳥居から始まり溜田の土手を通り、V字型に鋭角に折れて寺の正面に向かう。



古写真3 布施弁天開帳に向かう参拝者 1965年4月撮影 [市教委蔵]

- ・正面に橋本旅館が写る。旅館の営業は終わっているものの、通りに面する姿は往時の面影を留めている。
- ・参道入口の鳥居が見える。



古写真4 上空から見る布施弁天周辺 昭和50年頃撮影 [市教委蔵]

- ・橋本旅館の屋根には目地漆喰が「日」の字型に施されている。
- ・画面奥に建設中の新利根大橋が見える。

旅人は、旅館前の水路に架け渡した石板を渡り、正面中央の玄関で迎えられた。旅館の1階には家族の部屋や台所が配置され、2階の続き間は食事や宴会に使用された。上階は、地上から少し高くあがるだけでたいへん開放的で、春になると東側の廊下の窓から、あけぼの山公園の桜を一望できる。布施弁天の諸堂の屋根をもここから拝める。

宿泊客は、旅館の北側奥にある平屋の離れに滞在した。昭和40年代後半に火災で失われた離れには、6つの客室が横並びに配置されており、それぞれに床の間があり、花が生けられていた。

旅館の2階では、主に団体客を受け入れ、春には新四国相馬霊場八十八カ所巡りのお遍路さんが訪れた。布施弁天は取手から歩き始める旅程の中間にあり、先代坂巻孝氏と親交のあった板橋不動尊の住職がお遍路さんの先達を務めた。お遍路さんは米を持参し、旅館では卵焼きと漬け物を出してもてなした。また毎年初冬の11月頃には富山の薬売りが来て、風邪薬・腹痛の薬・目薬など薬箱の中身を補充しに離れに宿をとった。

利根川至近の立地を活かし、旅館ではうなぎや鯉こく等の川魚料理が名物であった。江戸時代末には天狗党の陣屋となり、また北海道に向かう土方歳三が宿泊し、さらには徳川慶喜が鴨猟の際に橋本旅館を利用したと伝わる。

かつて旅館の裏には何十人もが一度に入れる大きな舟風呂があって、第二次世界大戦後に泊まりに来た進駐軍の兵隊たちの間では、ヤギの乳を入れた風呂が人気であった。

昭和30年代に旅館の営業を終えたのちに、家族の住まいとして手が入れられながら、大切に使い続けられてきた。建物の歴史を伺うにつれて、現在は住宅の形式をとる室内からは、往時の旅館の姿が浮かびあがってくる。



春になると橋本旅館2階の東廊下からは、桜色に染まるあけぼの山公園への眺望が得られる。



橋本旅館 正面中央にあった玄関では多くの旅人が迎えられた。



坂を下り布施弁天に向かう参拝者の前に現れる橋本旅館



北東から見る
隅に反りのある重厚な軒廻りと入母屋造の屋根。
北面の小さな庇がかつての出入口の位置を示す。
この向かって右側に、平屋の女中部屋が取り付いていた。



南面の台所の土間には、3台のカマドがあった。
現在は拡張され、日当たりのよいサンルームとなっている。



鬼瓦 中央に家紋の抱き茗荷が見られる。



棧瓦葺の屋根 大棟は丸瓦を輪違いに積み、模様をつくる。



南妻 入母屋造の屋根の破風板下端に曲線が施され、柔らかな印象となる。妻壁は黄色の色壁。



緩やかな起伏の続く布施の町並みと橋本旅館。利根川対岸の取手の緑地帯が見える。



茨城より入手した、下屋全長に及ぶ一材からなる杉丸太の桁

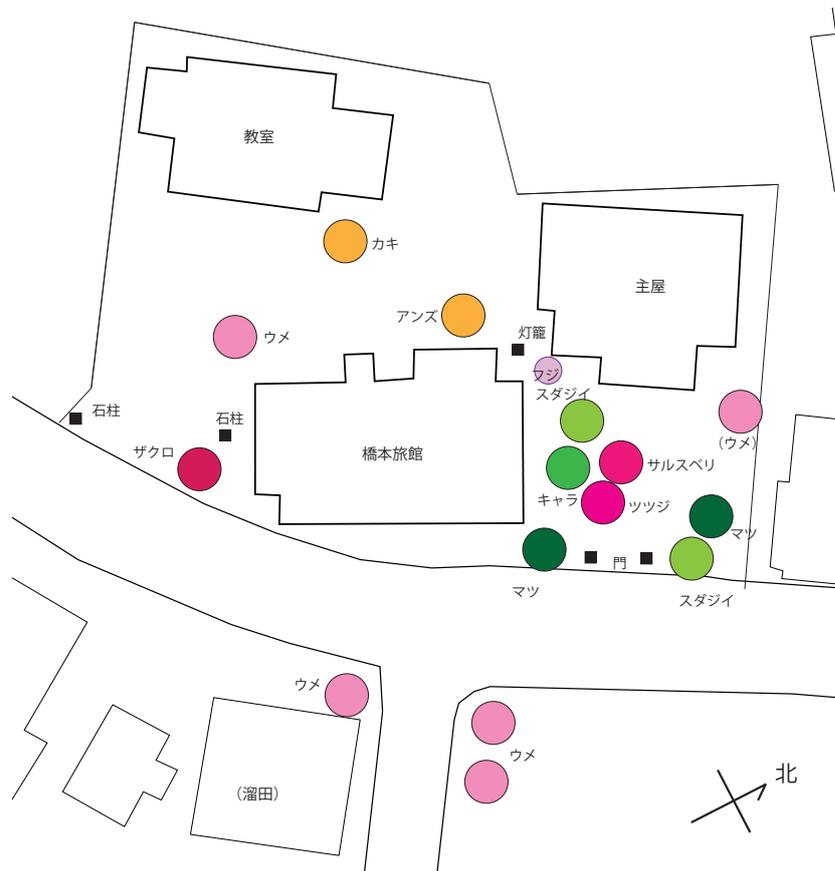


表から続く重厚な化粧軒は、側面から背面へと廻り、まばら垂木に鼻隠し板の簡素な造りになる。



背面に新設された玄関。住宅への改造時に正面玄関は閉鎖され、台所が造られた。

庭



敷地配置図・樹木図 S=1/300

柏市都市計画図を加工、加筆

旅館及び住宅を囲む庭には、旅館の庭木として手入れされてきた古木を含む樹木や植生が数多くある。離れの正面に見えたアンズの木は春に花をつけ、利用客が季節ごとに変化する庭を楽しんだ様子を想像できる。上図に教室と記す建物では、豚とチャボを飼っていた。



2-2 建物の特徴

橋本旅館の建物は、木造、2階建、入母屋造、棧瓦葺、規模は間口8間・奥行3.5間（間口、奥行共下屋を含む）とし、正面を東に向けて立つ。重厚な軒廻りを上層の正面と両側面に廻す。正面に取り付く下屋の軒は、杉丸太の長尺材からなる桁によって支えられる。外壁の大部分は金属パネルで覆われており、一部漆喰塗、玄関廻りはモルタル塗及びタイル張りとする。側廻り建具はアルミサッシに更新され、雨戸は利用されなくなっている。古写真から、当初の外壁は下見板張り、またガラス戸は引違戸ではなく、雨戸のように戸袋に納める形式であったことがわかる。その後ガラス戸と雨戸が共存した時代があったかどうかは、不明である。

・平面

尺寸を基準尺として設計された平面の大部分は、3尺（909ミリ）を単位とする格子上に配置された柱によって定められる。但し、正面下屋の出を4尺（1,212ミリ）とする。1階は正面と背面の2列からなり、桁行方向にそれぞれ3部屋を配置する。北壁沿いに設けられた階段から2階に一直線で上がる。2階では正面東側と背面西側全長に幅3尺の廊下を設け、この間に八畳間を3つ並べる。

1階平面北端の階段を一直線に登り、2階に至る。東側の廊下から、春には桜が満開のあけぼの山公園をのぞめる。8畳の居室3間からなる続き間を、ここでは便宜上、南から順に居室1・居室2・居室3と呼ぶこととする。居室と廊下境には障子を建て込み、部屋境には襖と板欄間（居室1—居室2境）・^{おさ}箴欄間（居室2—居室3境）を設ける。板欄間には、山と海あるいは川の風景が透かし彫りされ、板目の木目を効果的に用いて打ち寄せる波を表す。竿縁天井、板目の天井板。廊下の床板はイチヨウ材からなる。（旧状については、2-3平面の変遷を参照。）

・屋根

棧瓦葺の屋根頂上にある大棟両端の鬼瓦には、家紋の抱き茗荷がつけられている（当初の鬼瓦については後述）。台^{のし}熨斗瓦と^{のし}熨斗瓦の上に輪違いに丸瓦を並べ、^{がんぶり}雁振瓦をかぶせる。妻壁寄りの範囲では棧瓦の重なりに棒漆喰が施されている。この屋根がことさら重厚に見えるのは、葺き足が5寸5分と短い深切りの棧瓦が用いられているからである。古写真1に見るように前身建物の屋根は切妻



左図部分拡大

正面下屋の軒先 模様のない瓦 (A) と巴・唐草模様のある「柴安」瓦 (B) が混在。A は大屋根正面及び西面にも見られる、葺き替えられた瓦。

造であった。建て替え時に屋根を軒反りのある入母屋造とすることで、さらに立派な外観となった。

橋本旅館の屋根に葺かれている燻し銀色の棧瓦は、通常見るものと比べて屋根の流れに沿って瓦の枚数が多く配置されていることに気づく。この深切りの瓦は、屋根面を葺いた時に瓦が重なる角の切り込みを深くすることで、重なりを多くとり、葺き足（下の列の瓦との距離）が短くなるように作られている。すなわち瓦の枚数も多く必要となり、瓦を葺く手間もかかる。重厚に見えるだけでなく、屋根面を覆う瓦の層は厚くなり、建物を雨からまもる効果も高まる。

敷地内にこの形式の瓦が保管されていたことにより、詳細に観察することができた。次ページ以降に実測図と写真を掲載する「柴安」の刻印のある軒唐草瓦〔軒棧瓦〕と地瓦〔棧瓦〕で葺かれていた。地瓦とは、軒先より上方で最も枚数が多く屋根面を構成する瓦を指す。

また、旅館の屋根から降ろされた「橋」の銘の施された大きな鬼瓦が、両脇に取り付くヒレとともに残されている。鬼瓦が2点あるのに対しヒレは1組しかないため、ヒレや大棟廻りの瓦の落下がきっかけとなり、屋根の部分葺き替えが行われたことが考えられる。

現在、屋根全面と正面下屋庇の大部分に葺かれている軒唐草瓦を観察すると、正面と西面はすべて模様のない万十瓦であるが、背面と東面には、保管されている柴安瓦と同じ巴と唐草の文様の瓦が見られる。瓦の色や風合いの違いから、ある時期に正面と西面の軒唐草瓦、両端の鬼瓦、鬼瓦の納まりに関わる風切り丸や雁振瓦の一部などを新たなものに取り替えて化粧直しし、補足品の入手が難しかった地瓦については既存の瓦のままとされたようである。同様に地瓦の葺き足が短い下屋庇の軒先にも、万十瓦と柴安瓦が混在して用いられている。

実測対象とした瓦は軒唐草瓦と地瓦のそれぞれ1枚のみなので、瓦の製品精度や施工時の誤差、経年によるずれなど含んだ数値であるが、屋根面に葺かれた流れ方向の瓦の数枚から割り出した葺き足5.5寸（16.7センチ）、瓦の歩み8寸（24.2センチ）と合致する。

地瓦の裏側上端に、施工時に瓦棧にかける尻剣と呼ばれる爪が広くつけられるようになったのは、関東大震災以降である。多くの屋根から瓦が落下した経験から、安全性を考慮してつけられるようになった。柴安瓦には尻剣がなく、後述する柴安瓦の製造終了時期の歴史とも仕様が合致する。



「橋」の字の入った橋本旅館の前身鬼瓦とヒレ。
中央の鬼瓦下端の幅は52.5センチもある。

瓦調査

所見

・軒棧瓦

平部瓦当文様は、中心飾りに8の字文が配される「江戸式」が施されている。中央8の字文は沈線が入る。加藤晃分類（「江戸時代の瓦における「江戸式」の展開」『國學院大学日本史学専攻大学院会史学研究集録』14、1988所収）では中心飾りはⅡ、唐草はK、子葉はjに相当する。平部文様区外右側には方形枠に「柴安」の刻印が押される。中心飾り脇部、唐草、子葉はいずれも単線で、唐草の頭部は円盤状に肥大化している。丸瓦部瓦当文様は8つの点珠と中心部分に三つ巴文が施されている。棧峠は丸みを帯びる。凹面（表面）はミガキが施され平滑であるが、凸面（裏面）は整形の痕跡はみとめられない。平瓦部中央上部に焼成前穿孔の釘穴が1箇所みられる。

・棧瓦

凹面（表面）はミガキが施されているものの、凸面（裏面）は整形の痕跡はみとめられない。棧峠は丸みを帯び、頭側及び尻側に切り込みあり。凹面右、尻、頭の角、凹面左、頭角に面取りが施される。頭中央付近に方形枠に「柴安」の刻印が押される。

軒棧瓦、平瓦ともに凹面（表面）の劣化がみられ、葺き跡がみられることから、実際に屋根に葺かれていた資料であることがわかる。整形の様子は似ているが、全幅、全長ともに軒棧瓦に比べて、棧瓦が1 cm 以上大きい一方で、棧幅は軒棧瓦の方が広い。どちらも「柴安」の刻印がみられるものの、その字形が異なることから、軒棧瓦と棧瓦に使われた刻印の范は違うことがわかる。范の違いと大きさの違いに相関関係があるか否か今後の検討課題である。



軒棧瓦 正面



棧瓦 俯瞰

上方の深い切り込みにより、瓦の葺き足は短くなる。

瓦観察表

単位: cm

種類	文様	瓦当外形 瓦当内形	瓦当文様 区高	全長	全幅	厚	棧長 棧幅	頭切込長 頭切込幅	尻切込長	備考
軒棧瓦	小丸部: 右巻き三つ巴、連珠8、平部: 子葉 (くびれあり)、唐草 (頭円盤状)、中心飾り (脇くびれあり、中央8の字文、上部肥大、沈線)、点珠	7.6	2.2	25.5	26.8	1.9	19.8	—	6.8	刻印「柴安」、葺き足15.7cm、焼成前穿孔1
		4.3					5.6	—		
棧瓦		—	—	26.5	28.5	1.65	19.7	2.8	7	刻印「柴安」、葺き足17cm
		—	—				4.5	3.7		

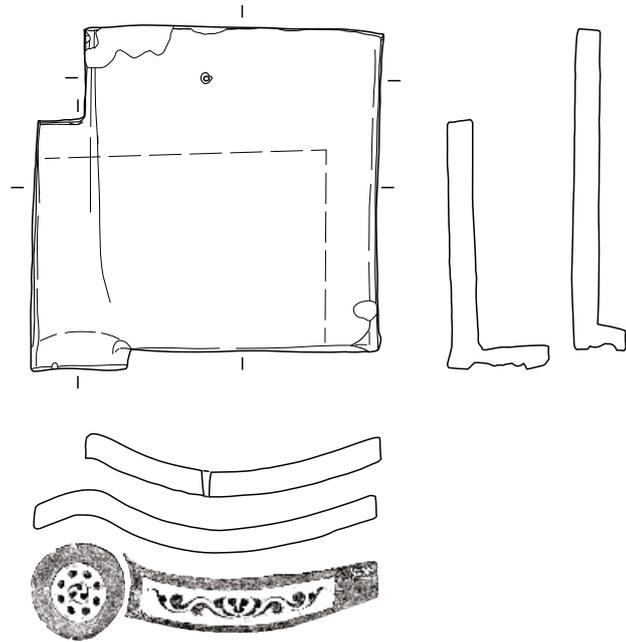
0 (1/6) 20cm



軒棧瓦刻印 (拡大)
「柴安」



S=1/1



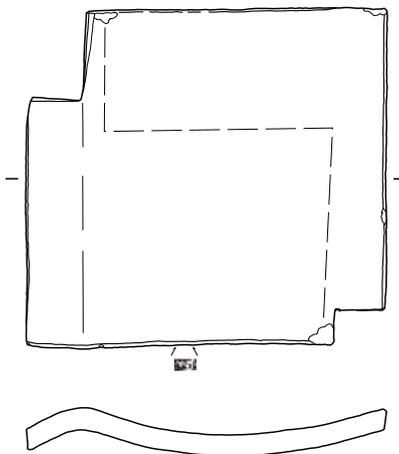
軒棧瓦 実測図・刻印拓本



棧瓦刻印 (拡大)
「柴安」



S=1/1



棧瓦 実測図・刻印拓本

また、1階背面廊下・1階南側の広縁・2階玄関の屋根には同じ煉瓦色の釉薬瓦が用いられており、同時期の改装であることがわかる。

柴安の瓦

敷地内に保管されている棧瓦は、橋本旅館の屋根に見られる瓦と同様に葺き足が短く、軒唐草瓦の文様が同じであることから、屋根葺替時に降ろされた瓦の中から状態のよいものを補修用に取り置いたものであろう。「柴安」の刻印より、東京で製造された瓦であることがわかった。

「柴安」の刻印のある瓦を製造したのは、現東京都葛飾区で鈴木安五郎の経営する窯であった。ここでは江戸時代末から関東大震災の発生した大正12年（1923）まで、瓦製造が行われていた。材料となる土が採取でき、燃料の確保と輸送に欠かせない水運に恵まれた葛飾区は江戸時代より瓦の産地として名を馳せ、今日の東京はもとより、江戸川を伝って商品は遠方へと運ばれていった。

同じ千葉県下の野田では、醤油醸造を担う家の屋根工事を市内の有限会社澤田瓦店（野田市中野台165）が代々担当してきた。5代目澤田政延取締役に対する、野田市教育委員会生涯学習課星野保則氏による聞き取りより、当店は「柴安」の瓦を取り扱っていたことが判明した。この瓦が使用された家には、高梨兵左衛門家／高梨本家、茂木七左衛門家／茂木本家、中野長兵衛家（茂木七郎右衛門家分家）、茂木啓三郎家（茂木房五郎家分家）、戸邊五右衛門家が挙げられる。なお、今日野田市市民会館として旧宅が活用されている茂木佐平治家には「柴安」の瓦は用いられていない。

高梨本家では、国指定名勝内にある複数棟の文化財建造物保存修理の記録によると、書院〔文化3年（1806）築〕に葺かれていた「柴安」の刻印のある棧瓦は、歩みは橋本旅館と同じ8寸（242ミリ）であるものの、葺き足を5.0寸から5.2寸（152-158ミリ）とさらに短くして、葺き重ねている。（註「名勝高梨氏庭園保存修理工事報告書」（2011）中、「安柴」と記載されている刻印が、正しくは「安柴」すなわち柴安を示すことが判明した。）また我孫子では、2016-18年に保存修理が行われた井上家住宅二番土蔵〔江戸時代末期築、我孫子市指定文化財〕の棧瓦に、「柴安」の刻印が確認されている。以上のように、普請に当たって上質な建築材料を求める中で「柴安」瓦が選ばれたことがうかがえ、またこのような採用事例から製造地に近い千葉県下にも製品が流通していたことがわかる。

・小屋組

梁間3間に渡された屋根の構造は、和小屋からなる。化粧垂木を受ける桁の高さに梁を設けて、この上に牛梁（中央）と廊下の入り側に桁行梁をのせる。これらに束を立てて小梁を受ける形式を2段設け、小梁の先端で母屋を支える。最上段の牛梁の上には棟束を立てて、野棟木を受ける。特に重量のある瓦葺を支えることを意識した構造にはされていない。

・軒廻り

野棟木と母屋で受ける野垂木は、背面でのみ地垂木を兼ね、桁を越えて外部に出る。

正面と両側面の軒廻りは、小屋組との間に懐を設けた本格的な化粧軒からなる。地垂木のみからなる一軒ながらも、化粧垂木は1間（6尺）あたり6支の枝割、すなわち1尺間隔で密度高く配置され、茅負と二重裏甲ひとのきを用いて、隅では軒を反らせる。化粧隅木先端を銅板巻きとする。さらに正面側ではかやおいと二重裏甲うらごうを用いて、隅では軒を反らせる。化粧隅木先端を銅板巻きとする。さらに正面側では窓上に丸太出桁の霧よけ庇を設ける。背面の窓上方にも庇がある。

小屋組



松材からなる和風の小屋組。画面左が正面側、下屋に向けて梁を突き出す。小舞野地、杉皮の屋根下地。見通した限りでは棟札や上棟式時の鎗矢や雁股はなかった。



画面右が背面側。柱材の転用（桁の下の部材）他、燻けた古材（前身建物の転用材か）が見られる。野垂木（地垂木）は桁を越えて軒廻りを構成する。



小屋組下方、正面側を見る。化粧垂木の尻が見え、軒裏に懐があることがわかる。牛梁に掛けた斜材を天井吊り木として野縁を支える。

室内 1階・2階



宝鑰（ほうやく） 隠れ笠 隠れ蓑 丁子 打ち出の小槌 七宝 巾着 宝珠

平書院 宝尽くしの板欄間



1階仏間 平書院 投網文様の障子建具、板欄間は宝尽くし（上図に詳細）



2階 東廊下 南を見る



イチョウ材の廊下床板

一方、背面では軒の出の短い、比較的簡素な造りとする。地垂木のみからなり、垂木先端に鼻隠し板を当てることで、側面から背面に短く折れる化粧垂木からなる軒廻りの厚さと調和させる。

妻飾りはなく、前包みと台輪の上にヤマブキ色の妻壁を設け、破風板下端は緩やかな曲線を描く。

建物正面全長に通された、茨城より入手した1本の大径材長尺物の杉丸太からなる桁は、旅館の土間から見える位置に配して建物の見せ場とするだけでなく、各部屋の室内にあらわされている。

2-3 平面の変遷

昭和30年代に旅館の営業を終えたのち、建物は家族の住居とするために改装された。1階の主な変更箇所と部屋の用途を下表に示す。(一部はさらに後年の改造を含む。)1階に大きな変化が及んだのに対して、2階では造作の改造や後年の南西隅への玄関増築を除き、ほぼもとの構成を保つ。

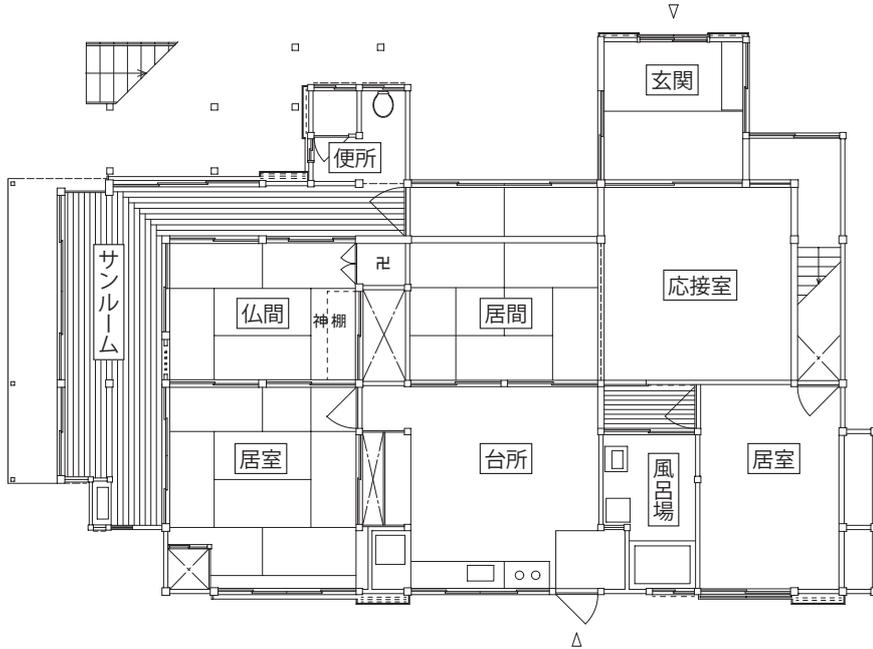
1階 家族からの聞き取りを参照しながら建物の変遷を整理し、平面の復原を試みた [p56 参照]。主要な柱の配置はそのままに、部屋間の間仕切りの位置や仕様、建具類が更新されたことがわかった。復原した昔の平面構成と現況を見比べると、壁があったところが開放されて襖や障子戸が建て込まれたり、逆に開口部が壁となり閉鎖されたところもある。1階では多くの柱の四方に板が張られている。これは改装時前の部材が取り付いた痕跡を覆い隠すために行われたものと推測される。

旅館から住宅へ

旅館	住宅に改造
正面玄関	→ 正面を閉鎖して台所に。西面に新たに突き出し玄関を増築。
台所・土間	→ 居室(南東) 仏間(南西) → サンプルーム(南面)
仏間	→ 居間
居室(北西隅)	→ 応接室
帳場	→ 風呂場
女中部屋	撤去
風呂場(西面)	撤去 便所南側に基礎残存

その他

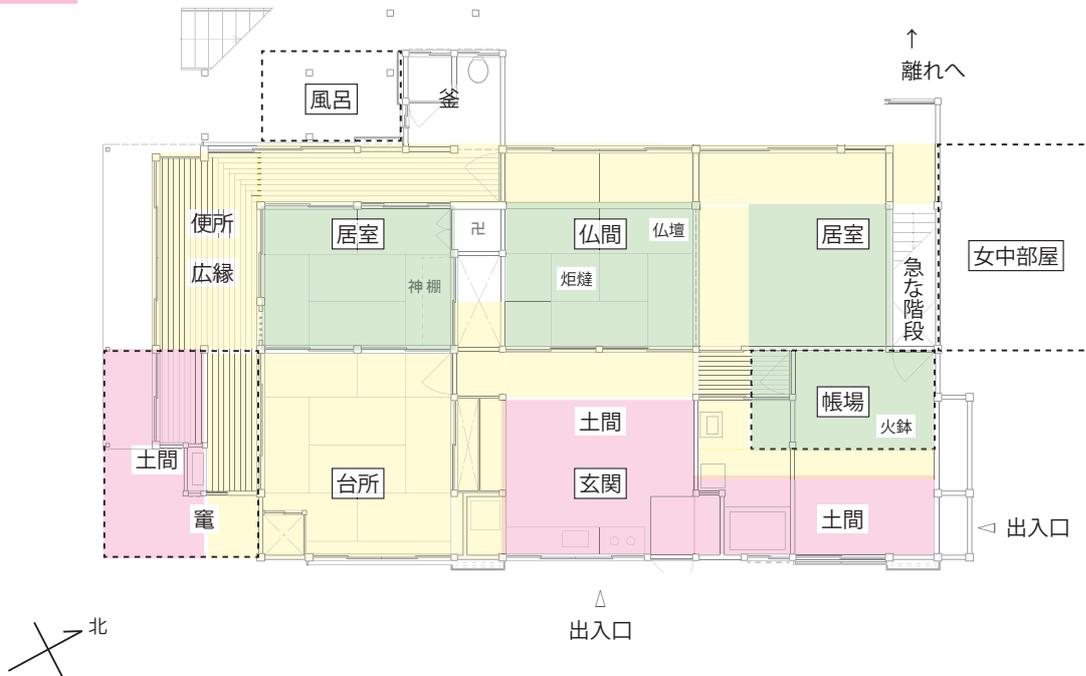
- ・台所の床は板敷きで床下に収納できる上げ蓋式。氷で冷やす冷蔵庫があった。
- ・西側の土間には3口のカマドがあった。
- ・台所から玄関を経て、仏間の北端にあった廊下を通して離れに料理を運んだ。
- ・帳場には火鉢があった。ここに盆棚を飾った。
- ・応接室となった居室は祖父母の部屋だった。



現状 1階平面図
部屋名称図

床の凡例

- 板敷き
- 畳敷き
- 土間



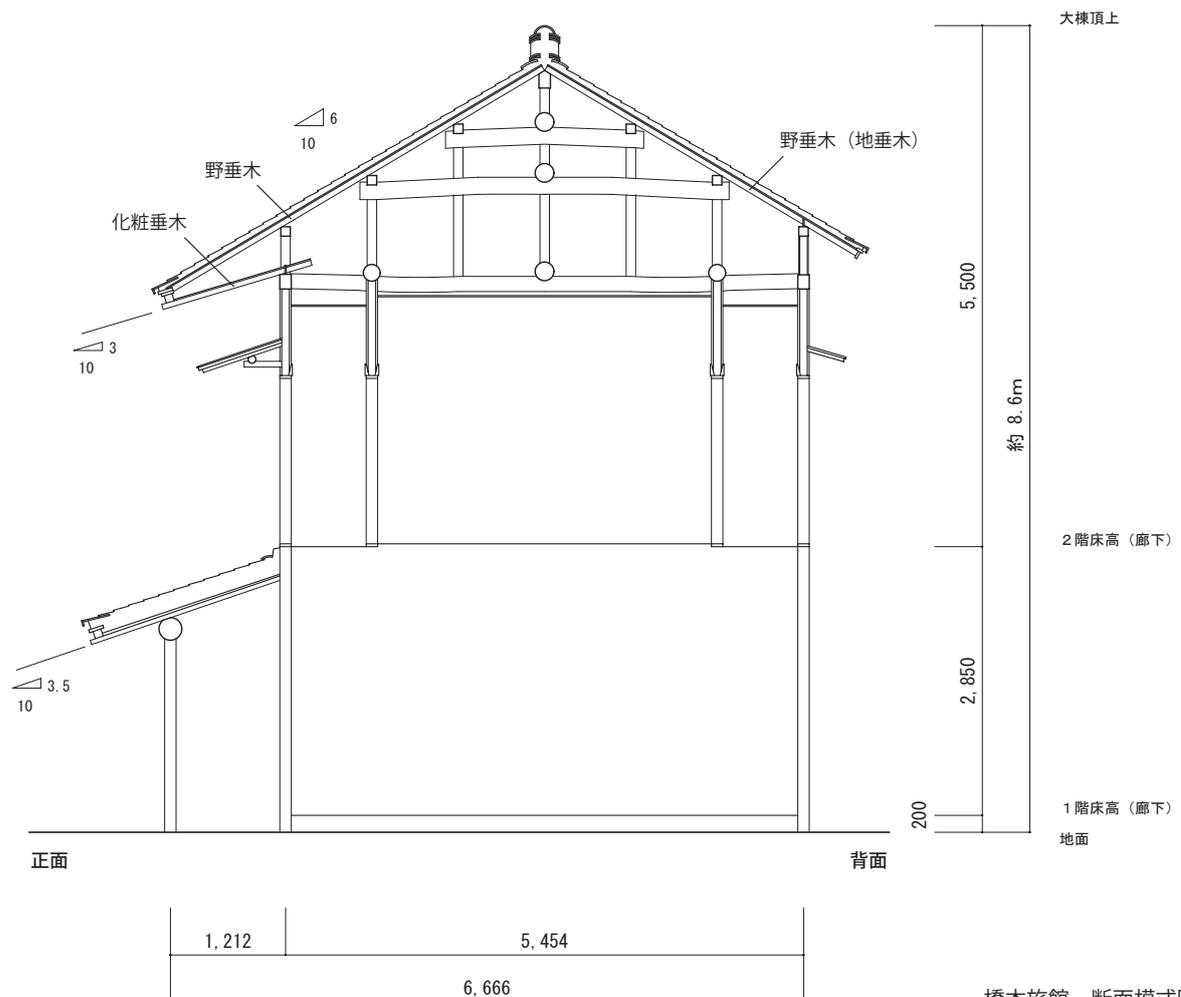
旅館時の部屋割と部屋名称を
現状1階平面図(上図)に重ねる

2階 先代の坂巻孝氏が詩吟教室を主宰していたことから、1970年頃に背面から直接2階に上がる鉄骨外階段を新設、南西隅に2階玄関を増築した。同時に背面廊下に流しと便所を設けたことで、上下階を分けて利用できる形式となっている。また、採光のために奥の部屋（居室1）の床の奥の壁に出窓が設けられた。居室3においては北壁から奥に張り出していた棚を撤去することで、階段を長くできるようになり、急な階段の勾配を緩くして踊り場が広くされた。

- ・居室1 床は出窓に改造されている。檜の床柱、モミジの落とし掛け、檜の床框が残る。床の天井では竿縁を中央で寄せて松葉のようにする。床脇の床は地板、地袋の痕跡はない。古写真から床脇には天袋と違い棚があったことがわかる。

- ・居室3 北壁西寄りに棚を囲んでいた杉しば丸太の「床柱」とモミジの落とし掛け、この向かって右側に煤竹を大胆に用いた丸い下地窓がある。床柱があるものの、階段頭上の空間を確保するために、床ではなく棚があった。現在棚の範囲には階段室に開く障子戸が建て込まれている。旅館であった時には、階段踊り場から居室に通じるこの下地窓をのぞいて、食事を出す頃を見はからったという。

- ・東廊下南端及び西廊下北端に押入。前者は、廊下の天井が押入の中まで続いていることから、後設されたものであることがわかる。一方、当初からある後者の押入正面には長押が回されている。



橋本旅館 断面模式図
S=1/80

古写真に見る橋本旅館



古写真5 旅館正面外観、北半分

- ・2階廊下は、腰付の掃き出し窓。縦框（たてがまち）が2本並んで太く写ることからガラス戸は引き違いではなく、雨戸のように戸袋に引き込んで開けたと思われる。
- ・2階戸袋は現状より深い。
- ・旅館の向かって右手に門柱。門口の南側は竹塀、北側は板塀。
- ・北面に平屋の女中部屋を張り出す。
- ・画面右手奥に離れが見える。



古写真6（1953年3月31日撮影）

旅館の玄関前の家族

- ・ガラス戸に「橋本屋」の屋号。
- ・中央のガラスのみ透明で、周囲は曇りガラス。
- ・大きな石敷きで側溝を渡って玄関に入る。
- ・ガラス戸の外に雨戸で戸締まり。
- ・長い桁が見える。



古写真7 旅館1階 火鉢前の女性たち

- ・一九五三、三、三日とある。
- ・どの部屋か不明。帳場か。



古写真 8 昭和 40 年頃

- ・旅館の営業終了後、正面に板塀を設ける。
- ・2 階廊下のガラス戸は下までガラスが入り、室内に手摺りが見える。
- ・2 間ごとに柱が立てられ、引違戸に変更されている。
- ・屋根瓦に目地漆喰がない。



古写真 9 「昭和 47.4 自宅を曙山公園より望む」
屋根瓦に目地漆喰が施されている。窓はサッシ、戸袋が現況と同じ。



古写真 10 背面玄関増築中
2 階の開口部は 1 間の間に引違窓



現況 古写真 6 に見る旅館玄関の位置を枠線で示す。



現況
古写真 5, 8 に写る
松の木。

室内 2階



棹縁を松葉状に配した床の天井



昭和40年代のクリスマスパーティー
床廻りの造作が写り、廊下境は縦格子の中央にガラスの入る腰付障子戸



2階居室1 西壁には床の間があった（現況）
向かって左に床、床柱を挟んで床脇からなる。



古写真に見る床廻り



床の前の先代



床脇の天袋と違い棚、
地板が写る。



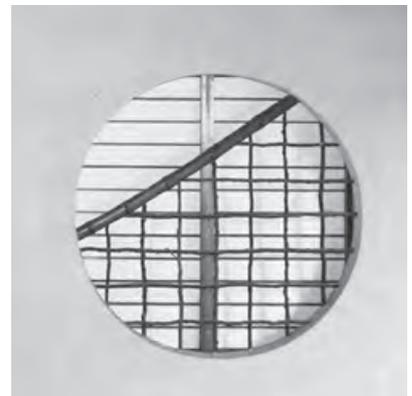
居室3 北壁には棚廻りの造作が残る。
杉絞り丸太の「床柱」とモミジの落とし掛け。
腰高の棚が階段の上方に突き出していた。



居室3 北壁全景 棚と丸窓から構成される。
棚は撤去され、階段室上方に開く障子戸が建て込まれている。



2階 居室2ー居室3境の箴欄間（居室2から見る）



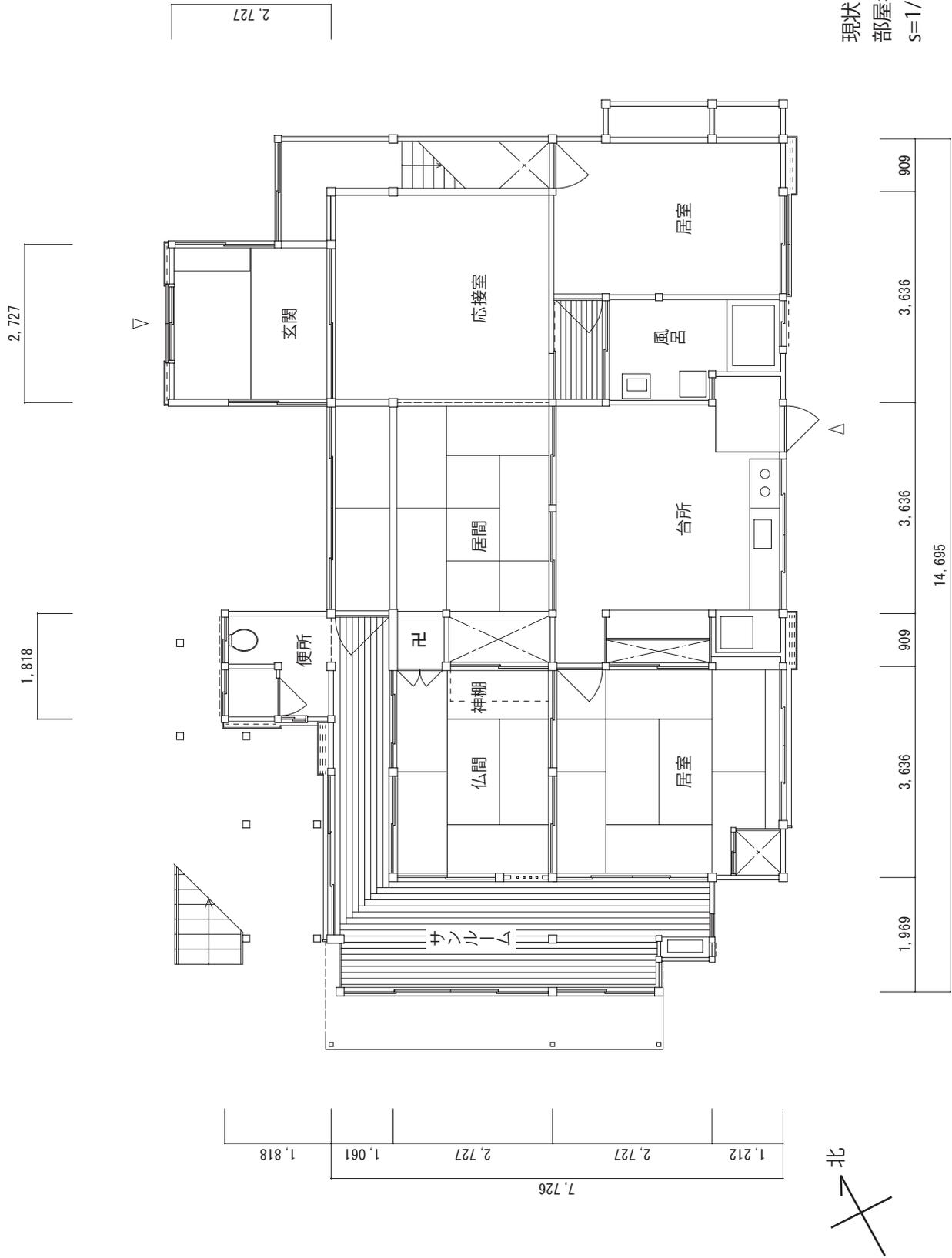
居室3 階段に面する円形下地窓
ここから料理を出す頃合いを見た。



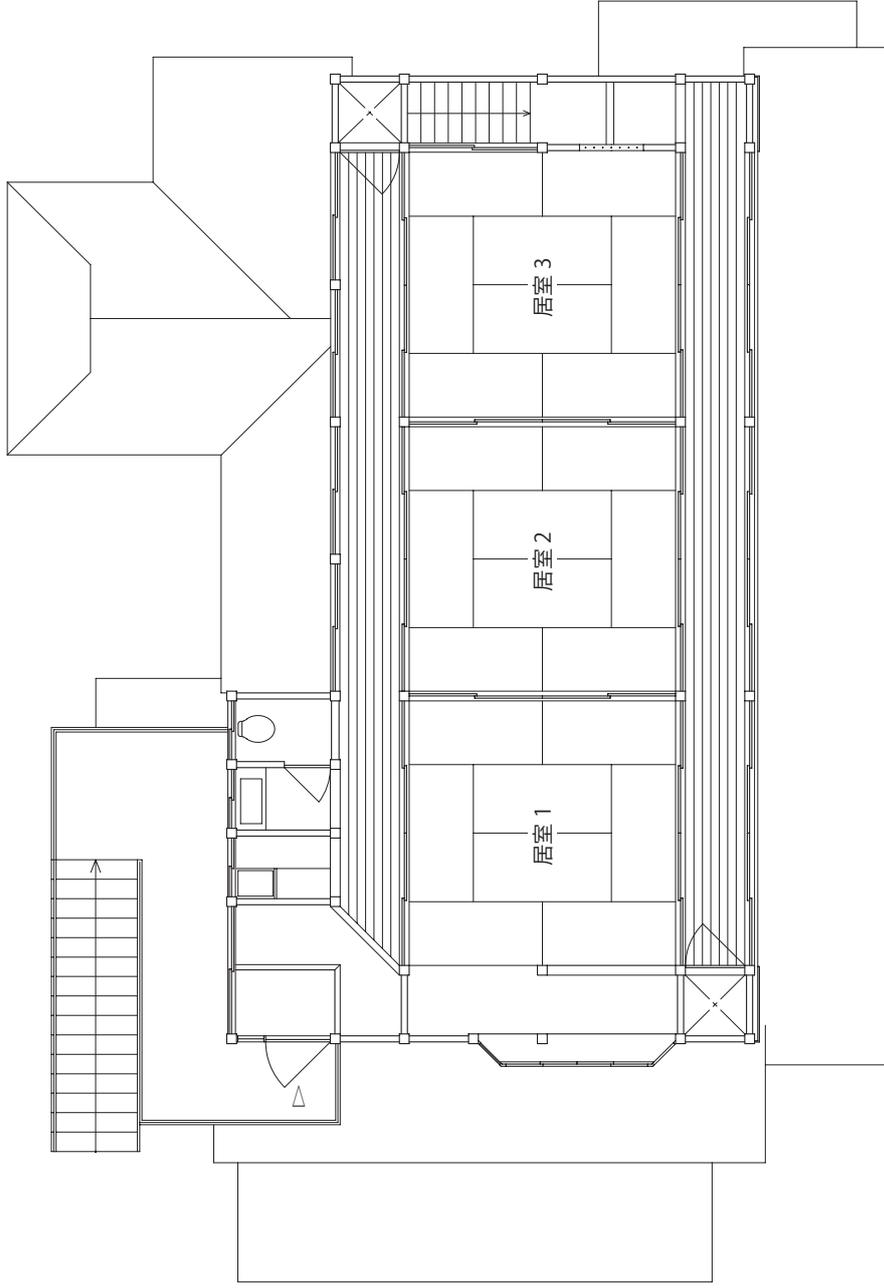
2階 居室1ー居室2境の欄間（居室1から見る）
[上]東側、[下]西側



2階踊り場から見る階段
丸窓外側の障子戸が見える。当初は
急な階段が画面手前寄りから始まった。



現状 1階平面図
部屋名称図
S=1/100

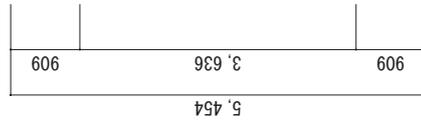
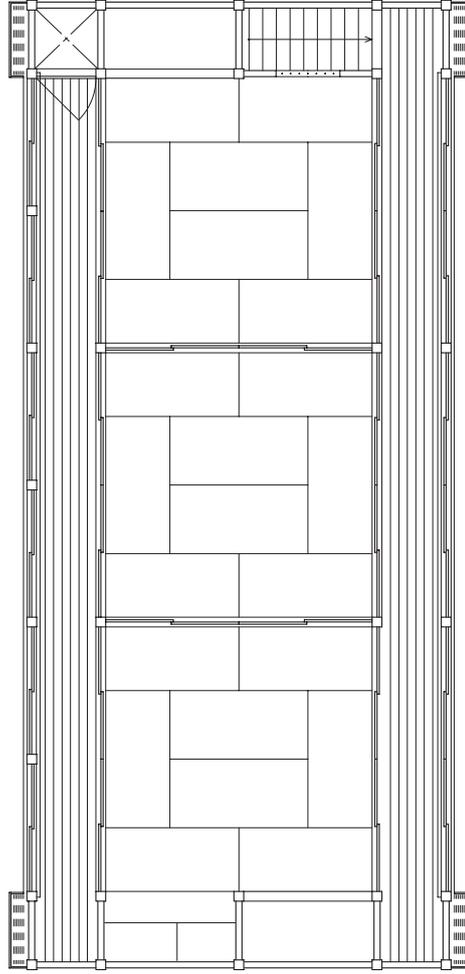


909	3,636	909
5,454		

909	3,636	3,636	909
12,726			



現状 2階平面図
 部屋名称図
 S=1/100



復原 2階平面図
s=1/100

第3章 三上家住宅

所在地：千葉県柏市今谷上町
建築時期：明治後期から大正期、
2013年解体

1 南柏と三上家の歴史

三上家の所在する柏市今谷上町は市南西部にあり、JR南柏駅東口一帯で、西側を松戸市、流山市と接し、旧水戸街道が南北を走る。地形的には手賀沼に注ぐ大津川の支流が北東、江戸川へ注ぐ坂川の支流が北西へそれぞれ流れており、両水系の分水界に位置する。

坂川流域には出土遺物が国指定文化財に指定される縄文前期の松戸市幸田貝塚が所在するが、内陸部に入ると総じて遺跡は希薄となる。松戸市の本土寺過去帳によると室町時代の後期に酒井根ヶ原(現在の光が丘団地)で太田道灌と千葉孝胤との間で一大合戦がおこなわれた記録が残る。酒井根の合戦と称され、古戦場跡地に戦死者を葬ったとされる首塚、胴塚が所在する。戦国時代になると大谷口にある小金城主高城氏の支配下になる。

今谷上町を含む南柏周辺が歴史に登場するのは、江戸時代になってからである。幕府は日本橋を起点に五街道を設置し、それに準じる脇街道も順次整備した。千住と水戸を結ぶ水戸街道もその一つで、現在の旧水戸街道と重複する。南柏一帯は小金宿と我孫子宿の間に位置し、関宿、結城を経由する日光東往還道の分岐点にもなっている。さらに幕府直轄の牧場である小金五牧の一つ上野牧の南側に位置し、旧水戸街道沿いに名残の野馬除土手を見ることができ、牧と街道を画する木戸が設置されていたことが、絵図(註)や発掘調査で確認されている。江戸中期、財政再建を目指す8代将軍徳川吉宗は享保の改革で、殖産政策の一環として新田開発を推進し、南柏周辺もその開墾対象となった。これにより、享保年間の検地で「下総国葛飾郡今谷新田」と「小金上町新田」の二つの村が誕生する。しかし、水資源に恵まれない内陸の開墾は容易では無く、開発は困難を極め、当時あった市内の中でもっとも小さなものであった。

明治になり牧が廃止されると開墾事業が本格的に始まり、柏市南部にあった11の村は明治22年



図1 南柏位置図



図2 三上家住宅位置図

の小村が合併し、「東葛飾郡土村」になる。明治 29 年日本鉄道（株）土浦線（現在の常磐線）田端～土浦間が開通した。昭和 25 年、今谷新田と小金上町新田が合併して土村今谷上町が誕生する。そして、昭和 29 年に東葛飾市を経て柏市今谷上町となる。

昭和 28 年南柏駅の開設、昭和 32 年光ヶ丘団地入居に端を発し、東京のベッドタウンとして発展し今日に至り、今谷上町は南柏駅の表玄関になった。

三上家に残る古文書によれば、寛政元年（1789）十月、今谷新田名主今谷之助が領主宛に田畑を造成するにあたり田畑起返の届け出をしている。当主は代々「今谷之助」を継いでいる。そして、今谷之助が拓いた新田が地名の由来とされる。大正期には東葛飾共同馬車組合長として三上勇之介の名前が見える。

註 「小金原勝景絵図」（船橋市立西図書館所蔵）に見られる水戸街道の新木戸付近は今日の今谷上町あたりである。

2 三上家住宅旧主屋

2-1 概要

三上家は今谷上町の町名の由来となった今谷新田の名主、今谷之助を代々継ぐ、この地域における名家である。三上家住宅は JR 南柏駅南側、柏市今谷上町の旧水戸街道（県道 261 号線）沿い南側現千葉銀行建物の裏に位置する。現在は同敷地において、昭和 45 年（1970）頃から花店を経営している。

三上家旧主屋の建築年を記す歴史資料は見つかっていないが、現所有者の三上周史氏の曾祖父にあたる三上勇之助氏の時代、明治末期から大正期の建築といわれる。建物は当初、現敷地から北側の旧街道をはさみ、道に南面する現自転車店の土地あたりにあったが、昭和 15-25 年（1940-1950 年代）頃に現在地に移築された。

南柏周辺は昭和中期の駅開設から発展を見せ、特に 2000 年代に入る頃から東口駅前の開発が進んだ。今から少し前には近所に茅葺の住宅が他にもあったというが、現在近隣で茅葺の建物は三上家旧主屋と稲荷神社のみである。

南柏の人々の生活を伝える歴史的建造物として稀少であり、また柏市今谷上町の町名の由来となった今谷新田の名主・三上家の住宅として、町の歴史を伝える重要な文化遺産である。

三上家の敷地には、北西中央に旧主屋（増築洋館）、旧主屋の東側に茶室、南の西寄りに新居、新居南に店舗と販売所、南東にビニルハウス数棟が建つ。主に敷地の北西側に居宅建物、南東側に三上家が経営する花店の建物が配され、い

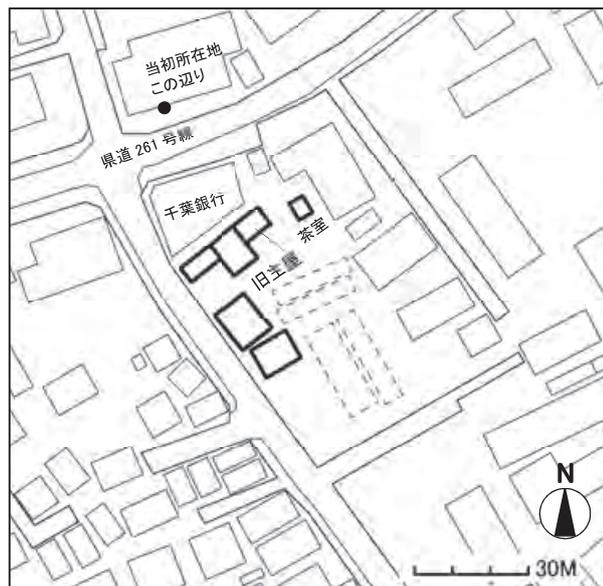


図 4 三上家住宅 配置図

ずれも南西側の通りに対し敷地入口を設ける。現敷地は北側にある旧街道に面していないが、昭和57年（1982）に銀行が建つ以前は、この敷地も三上家が所有していたという。1970年頃に建物南西側に木造2階建の洋館が増築された。洋館1階は洋室、風呂、台所を備える。増築以来、玄関はこの洋館南西側が担っている。

本調査では増築の洋館を除いた茅葺建物の旧主屋の調査を行った。次に詳細を述べる。

2-2 旧主屋

2-2-1 構造形式

1) 平面

旧主屋建物は木造平屋、寄棟造茅葺、平入で南東を正面とする。桁行5間、梁間2間半の規模で、現状の平面は北東側から8畳と6畳の座敷を配置し、両座敷は正面の庭に対して縁を介した開放的なつくりとなっている。建物西に堀炬燵のある4畳半、南に洋室6畳のある4室の構成であり、南東と北東の2面に縁をまわす。縁は棧瓦葺とする。北角には便所を、縁と同様の軒を回す形式で配置する。

建物南西面には昭和45年（1970）頃に増築された木造2階建の洋館が接続している。また、背面（北西面）には桁行2間、梁間1間の物置を付属する。

8畳

建物の東側に位置する。桁行、梁間各2間の居室である。北西面東寄りに巾1間の床の間、北西面西寄りに1畳の押入れを設ける。桁行方向の竿縁天井で、床の間を除き内法長押を巡らす。床の間寄り北東面に半間の平書院が付し、その他の縁境は腰付障子（ガラス窓付）を引違いに入れる。南西側6畳間との室境は襖4枚を2本引に入れ、上部は小壁に下地窓を設ける。

6畳

8畳の南西に位置する。桁行1間半、梁間2間の居室である。桁行方向の竿縁天井で、内法長押を巡らす。北西面東寄りに半畳の仏壇、北西面西寄りに1畳の押入れ、仏壇と押入れの上部、東から1間分を神棚とし、小壁から突出する。8畳と同様、縁境は腰付障子（ガラス窓付）を引違いに入れる。6畳間の下手側の中央に7寸角の太い柱を立て、南西側の2室との室境には差鴨居を用いる。4畳半との境は開き、2溝入るが現状建具はない。洋室6畳との境は壁となっている。

各室は襖で仕切られるが、6畳の座敷と洋室6畳の間には壁が入る。

縁

8畳と6畳の2室を囲むように南東面と北東面には半間の^{くわえん}樽縁が付く。側廻りには約φ200の丸桁を用い、現状は2面ともガラス戸（アルミサッシ）が入り、雨戸を備える。戸袋（アルミ製）は縁の北端と西端の各辺それぞれに付く。南西端の洋室6畳との境は現状木製の開き戸となっている。

4畳半

6畳の南西側には2室あるが、うち北西側は4畳半の北西面に奥行約500mmの窓（下部は地袋）が付く室である。桁行方向の竿縁天井で、南西を除く3面は差鴨居・差物を用い、南西面と北東面



外観 正面（南東から）



外観 斜め（東から）



外観 側面（北東から）



外観 斜め（西から）



内観 6畳から8畳をみる



内観 8畳から6畳をみる



小屋組 東から西をみる



茶室 正面（西面）

壁面は内法長押を有す。南東の室境は鴨居に2溝残るが、建具は入れていない。室中央には約1畳の掘炬燵がある。

南西面は増築洋館に接続する。

洋室6畳

6畳の南西側、正面側には約6畳の現洋室が位置する。北東面縁との境には開き戸、南西面北端に洋館の廊下へ接続する開き戸を設ける。大壁仕上げで床はフローリングである。また、茅葺の本屋から突出した部分は、縁側の瓦葺に対し、増築洋館1階の庇と同様の板金（銅板）葺である。

当初はこの洋室6畳が土間仕上げの玄関であったが、洋館を増築した際に、床敷きで玄関を窓に変更したと考えられ、現状は洋館の南西面に玄関を設ける。

便所

8畳の北側に位置する。東側縁の北突きあたりに木製開き戸の入口を持つ。北西面は中央の柱をはさみ、内法下高さ約1尺の窓を設ける。各柱間に木製ガラス戸2枚を2本引に入れ、外側には二間にわたり約150mm間隔でφ12mmの鉄格子がつけられる。内装、便器は新規に変更されている。

物置

便所の南西に位置する。建物に付属し、外部に入口を持つ。桁行2間、梁間1間の約4畳である。屋根、外壁の仕上げから判断して、物置は後世の増築である。

2) 基礎

縁の束石は高さ100mmの四角錐台の形状である。外側から確認ができた、南西の洋館接続面を除く3方は布石で、柱・束下部のみ猫土台をはさみ隙間を設け、その上に土台、柱または束がのる。ほかは丸石を用いた礎石立てである。(写真1、2)

3) 軸部

南西面を除き外側から確認ができた3面は基礎上に土台を廻し、柱を立てる。また、地貫及び根太受けが付く。梁間方向に丸太の大引きを通し、桁行方向に丸太の根太をかける。柱はほぼすべてが106～110mmの方形である。6畳南西中央の部屋境の7寸（約210mm）角の柱、6畳の仏壇と西



写真1 縁下



写真2 床下

側押入れの間が134×130mm、8畳床の間の床柱が変木を加工しており約200×110mm、と異なる。

4) 小屋組

小屋組は折置組おりおきぐみをなす。桁行の7寸角柱上の通りにφ140の梁が架かり、梁行は室境の通りと、室中央の通り（桁行一間半の場合座敷寄りから半間）を原則とし、計5本、φ130～190mmの梁が架かる。前述の桁行の梁に対し、中3本の梁行の梁は上におく。側面側2本の梁行の梁は桁行の梁を上におき、その上にななめの材（隅木か）が桁行方向対称に正面（南東面）の両角から45度で2間分内側方向に架かる。5本の梁行の梁の上に、桁行の梁が背面（北西面）側から半間の通りに架かる。4周の桁は100mm角で、これらの梁の上に架かる。

梁間方向の梁と同じ通りの中心（棟通り）に小屋束が建てられ、同通り上に約45度の傾斜で叉首さすが組まれる。桁行を小屋貫が通り、棟木に届かない建物側面側（北東・南西端）の束はさらに内側隣の束とのみ上端を繫梁で固定される。叉首組の上にはφ100の棟木が結われる。

室境のみ梁下まで土壁で塗込められる。

5) 屋根

梁間2間半、桁行5間を寄棟造の茅葺とし、縁側と便所屋根は瓦葺である。また、6畳洋間の南東面突出部は金属葺、物置は波板葺である。現在の茅葺は平成15年（2003）に、三上家が氏子で



写真3 小屋組 西から東を見る



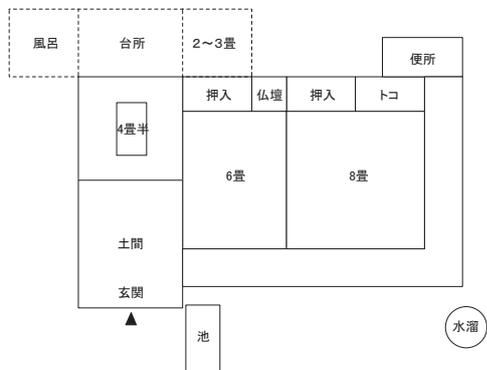
写真5 グシ棟



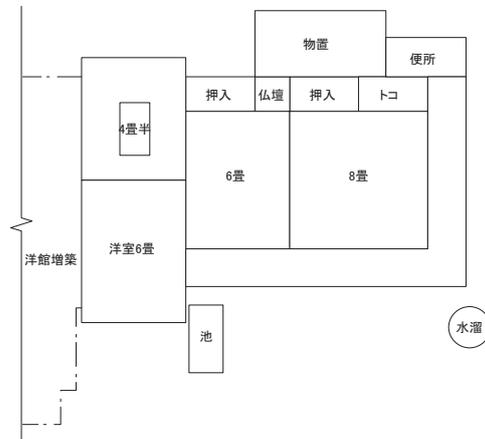
写真4 小屋組 東から西を見る



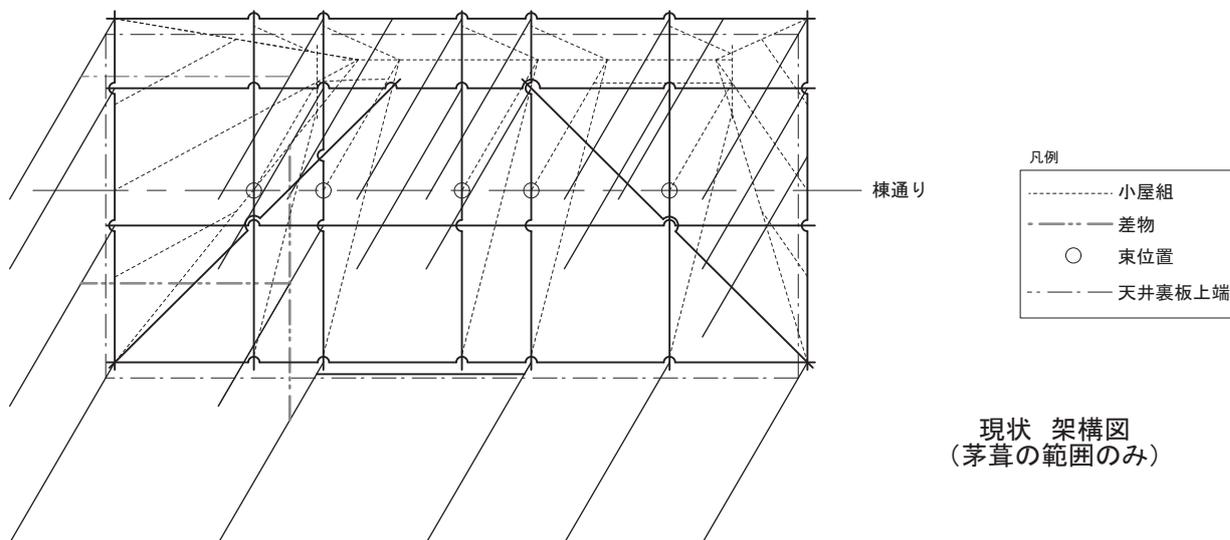
写真6 茅葺隅部



洋館増築前1970年頃(聞き取りによる) 略平面図
縮尺1/200



現状 略平面図
縮尺1/200



現状 架構図
(茅葺の範囲のみ)

ある稲荷神社（今谷上町 63）（写真 11）の茅葺替に伴い、柏市高柳の棟梁のもと、葺き替えられたものである。

茅葺は 4 周側桁が垂木竹を受ける形式である。4 隅は棟木端と追又首でつなぎ、寄棟屋根を形成する。又首流れに 7 通り屋中竹（中央通りのみ丸太材）をのせ、垂木竹をのせる。又首から垂木竹を荒縄で固定し、えつりを敷き、茅をのせる。軒付の最下層には稲藁を葺き、古茅と新茅を層にして葺くなど「筑波流」の葺き方をみせる（写真 6）。垂木の外側先端には鼻隠板を付け、梁端部は隠れる。

グシ棟は割竹を全面に被せる（写真 5）。

6) 造作

土壁

室内は土塗仕上げで、縁の壁面は鼠漆喰仕上げである。背面（北西）外壁は物置北西面を除き、内法下を押縁付横板貼とし、上部を漆喰仕上げとする。

床の間

床柱と落とし掛けには変木を用いる。床板の奥行巾は約 500mm、厚さは 55 mm で、床板上面は畳面より 120mm の高さである。



写真 7 8 畳 床の間と仏壇



写真 8 洋室 6 畳と縁の境



写真 9 茶室 南面



写真 10 南から見る 旧主屋と西側に接続する洋館

仏壇

木製である。上部は腰付格子戸 4 枚を 2 本引に入れ、中央に引出、下部に引違い板戸が入る。仏壇最上部の欄間中央には三上家の紋（丸に三つ鱗）が記される。制作年代は明らかでないが、位牌には江戸期のものも存在する。

7) 庭

建物の正面である南東側は庭である。6 畳、8 畳の 2 室は正面縁にむかって全開口とし、庭に対し開放的である。現状から当初の庭を知るのは困難であるが、建物正面西寄りの雨戸戸袋前に約 1 畳の池、正面東角に直径 1m 強の円形の水溜（コンクリート製）を確認できる。両方とも雨水を蓄えるよう雨樋からパイプを引いている。また、8 畳前の縁前には大きな沓脱石を配しており、門から茶室にかけて建物正面前を横切る飛び石が見られ、特に茶室周りに中木が数本生える。

2-2-2 変遷

三上家旧主屋は所有者の周史氏の曾祖父にあたる三上勇之助氏の時代、明治後期から大正期の建築とされる。祖父の信次郎氏は昭和初期（1930 年代頃）に 15 歳で養子として三上家に入った。信次郎氏は農家や養鶏、養豚も行ったが、第二次大戦後からは植木屋（盆栽・植木の卸）を主に行っていたという。現在三上家が経営する花店は昭和 45 年（1970）頃から始められた。

昭和 45 年同時期には旧主屋西に洋館が増築されている。洋館増築後は、周史氏の父である勇之助氏家族は主に洋館で、祖父母の信次郎氏、千代氏は旧主屋で生活していた。同時期、周史氏の幼少期には、堀炬燵のある 4 畳半は家族の居間のように使用されており、この北西側には、竈のある台所、さらに台所西側に風呂場、台所東側に 2～3 畳の部屋（祖母、千代氏が使用していた）が存在したようである。それらは千代氏が他界した昭和 53 年（1978）頃から徐々に変更され、現状の間取りになったという。

またこの時期、近年に新居が建てられる以前までは、敷地に建つのは旧主屋と洋館、茶室、ビニルハウスのみであったという。

南西に位置する洋室 6 畳は、もとは土間仕上げの玄関であり、南東を入口としていた。洋館に合わせた仕様が見られることから洋館建築と同時期に大きく変更されていることが想定される。

古写真（写真 11・12）は、昭和 40 年代に撮影されたものであるが、縁側のガラス窓の様子がうかがえる。

物置は恐らく信次郎氏の書庫として、後に建てられたもので、近年 20 年程は使用されていない。

旧主屋の茅葺屋根の葺き替えは平成 15 年（2003）に三上家が氏子である稲荷神社（千葉県柏市今谷上町 63）（写真 13）の葺き替えに伴い行われた。柏市高柳の棟梁が担当し、作業は周史氏父の勇之助氏を始め、近隣住民の協力のもと行われた。

庭の池には以前、鯉やカエルがいたが、観賞用というよりも、井戸が建物からやや離れてあったた



写真 11 古写真（昭和 40 年代）



写真 12 古写真（昭和 40 年代）

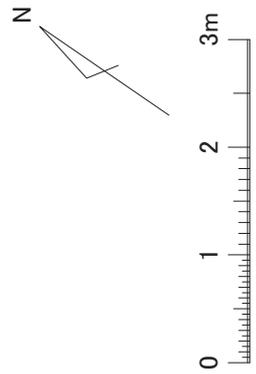
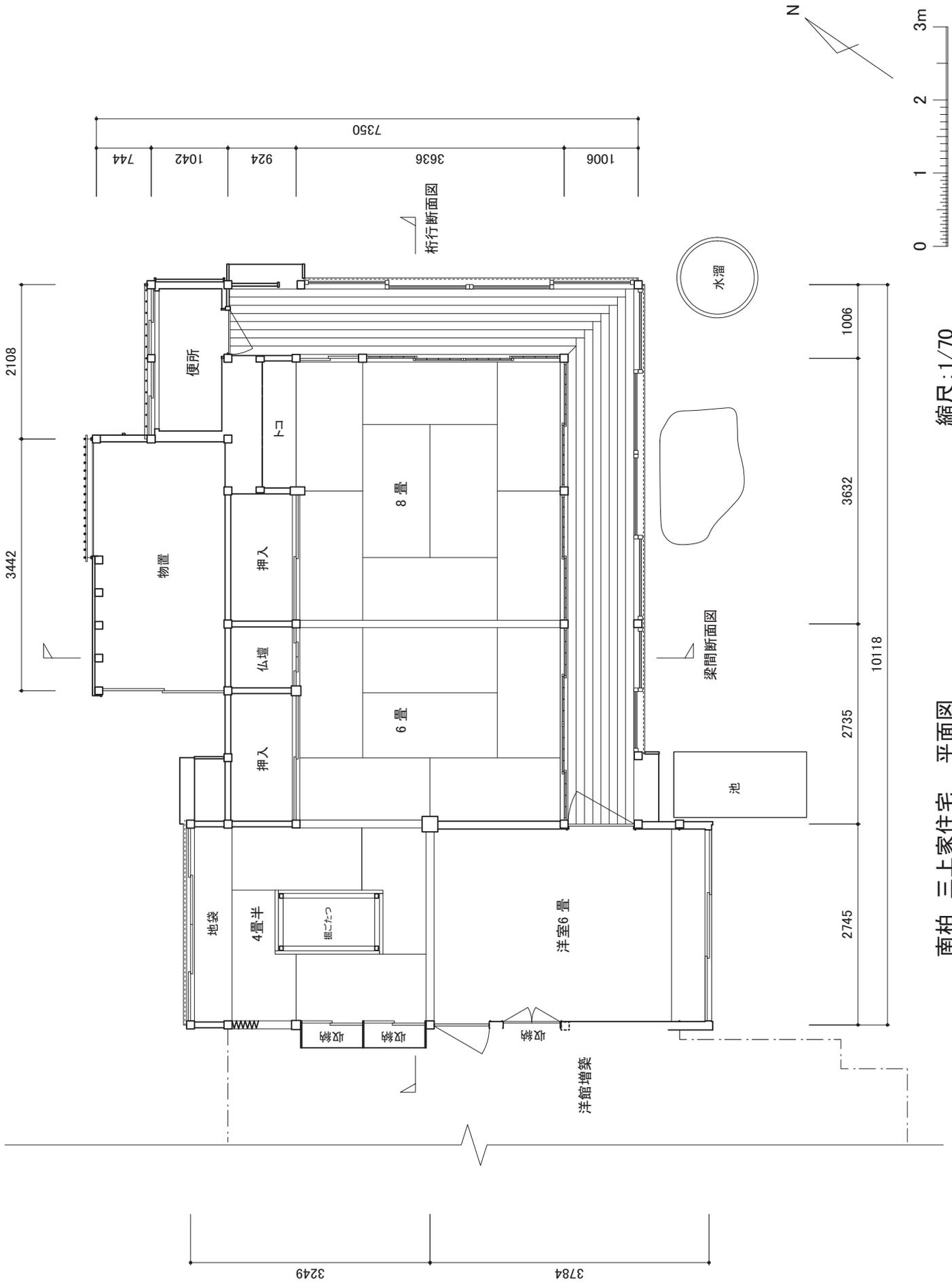
めに水を貯めるためという役割が重視されていたという。庭は以前は竹林であったため、建物下の地面には現在も所々に竹が生えている。

東側に建つ茶室は千代氏の建築で、50年以上前の建築といわれる。近年は20年程使用されていない。

※ 建物の来歴については、平成25年9月4日に行われた現所有者の三上周史氏からの聞き取り調査による。

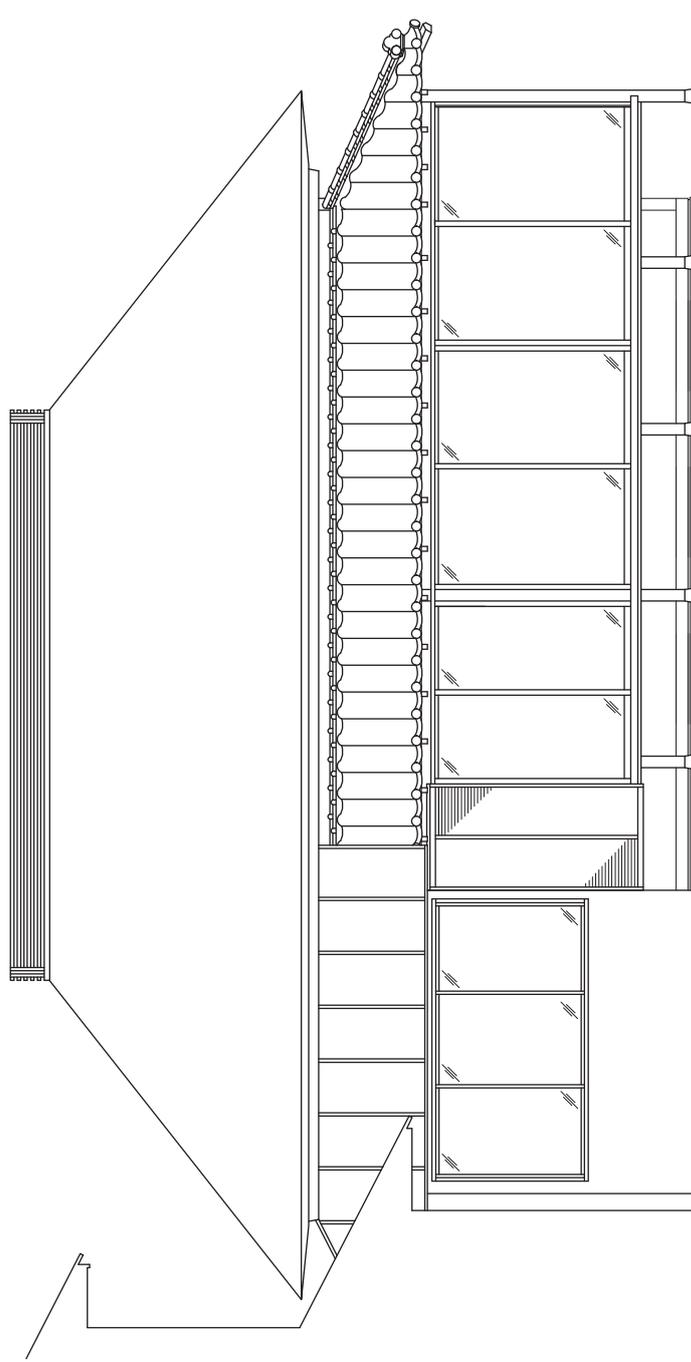


写真 13 稲荷神社（今谷上町 63）



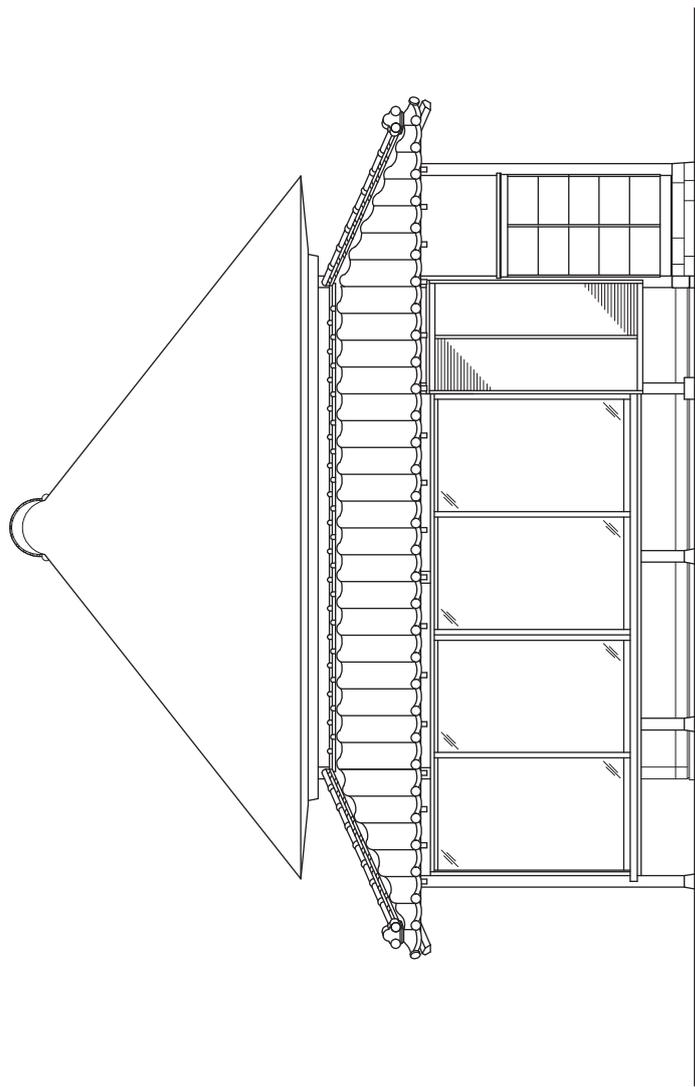
縮尺: 1/70

南柏 三上家住宅 平面図



縮尺: 1/70

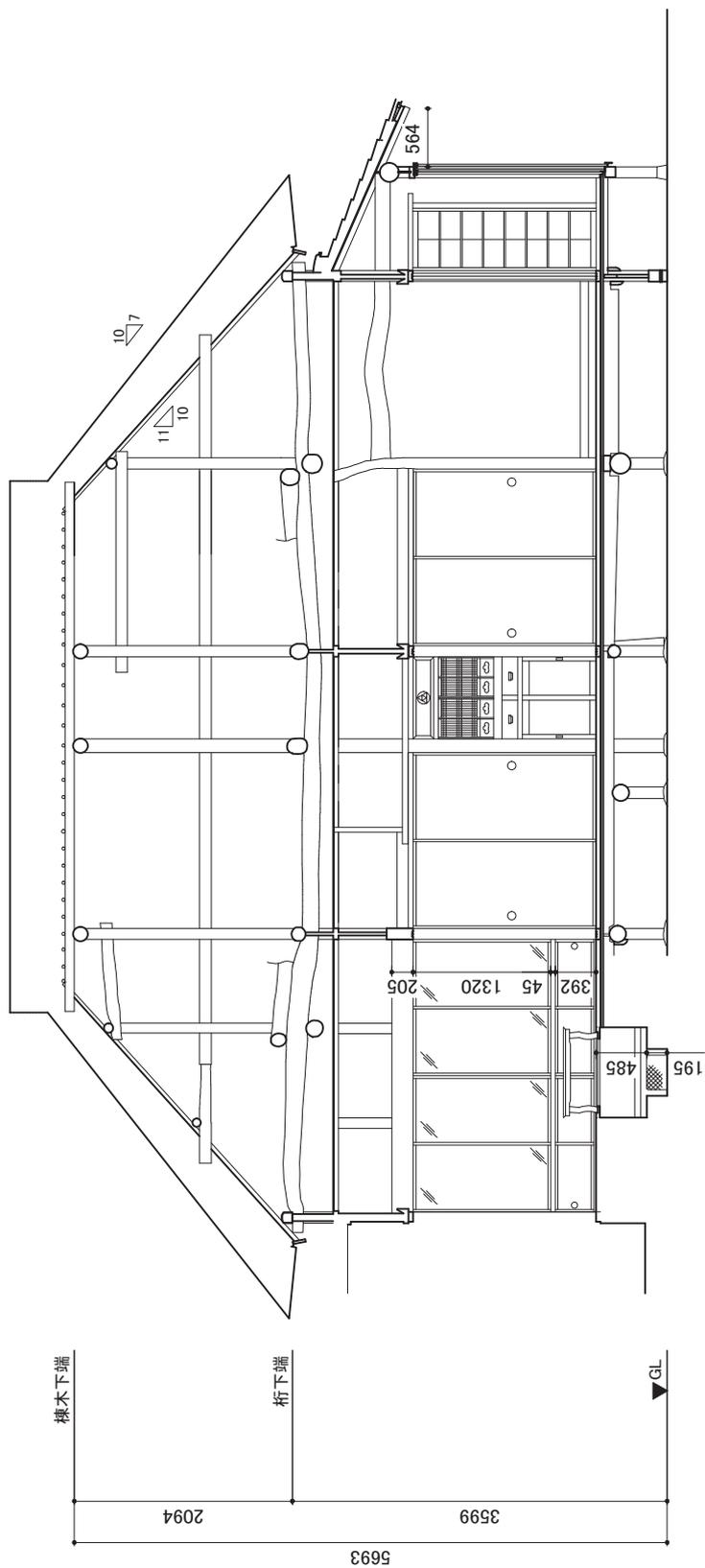
南柏 三上家住宅 正面図(南立面図)



南柏 三上家住宅 側面図(東立面図)

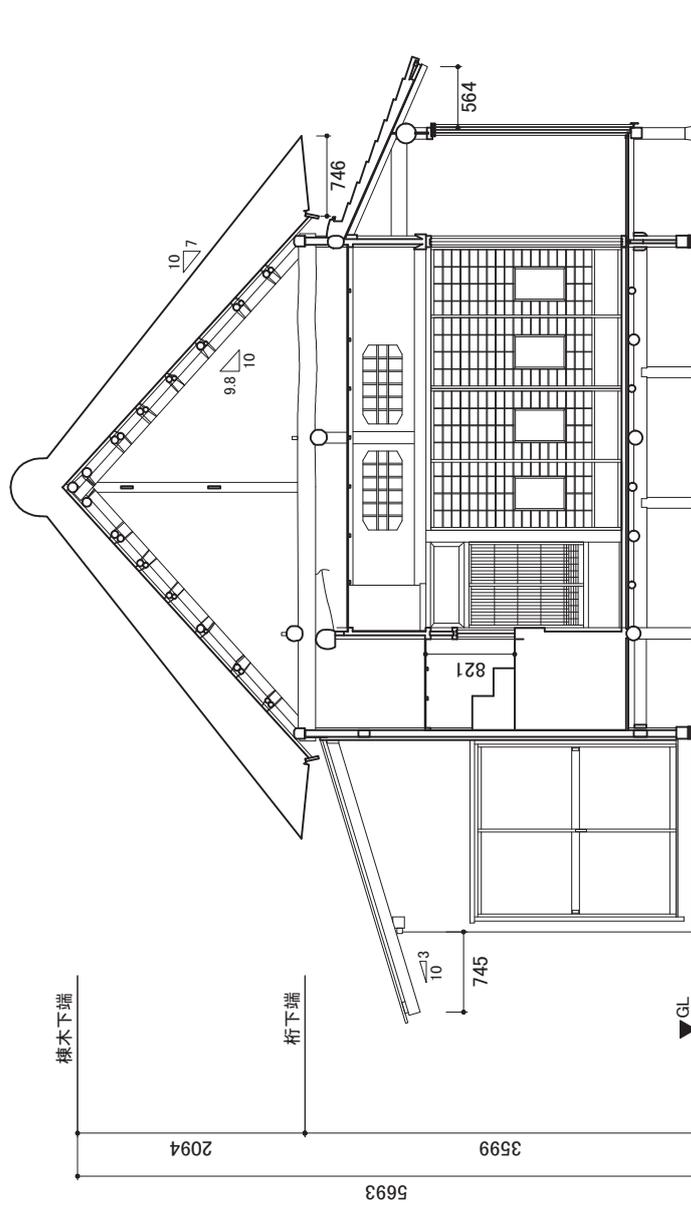
縮尺:1/70





縮尺: 1/70

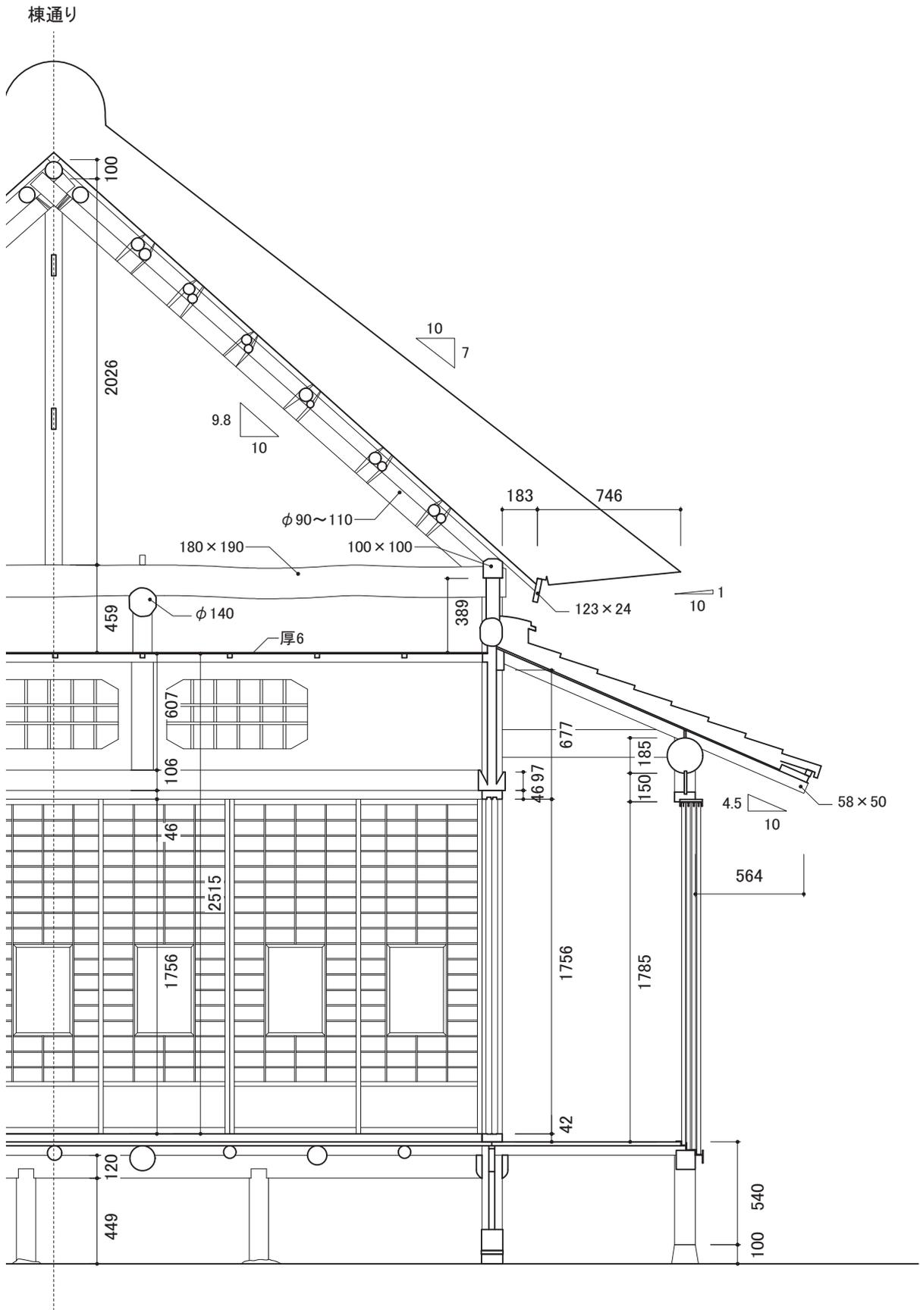
南柏 三上家住宅 桁行断面図



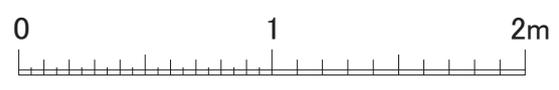
南柏 三上家住宅 梁間断面図

縮尺: 1/70





南柏 三上家住宅 矩計図(梁間) 縮尺:1/30



第4章 吉田家住宅

所在地：千葉県柏市花野井 868

建築時期：明治 27 年（1894）、

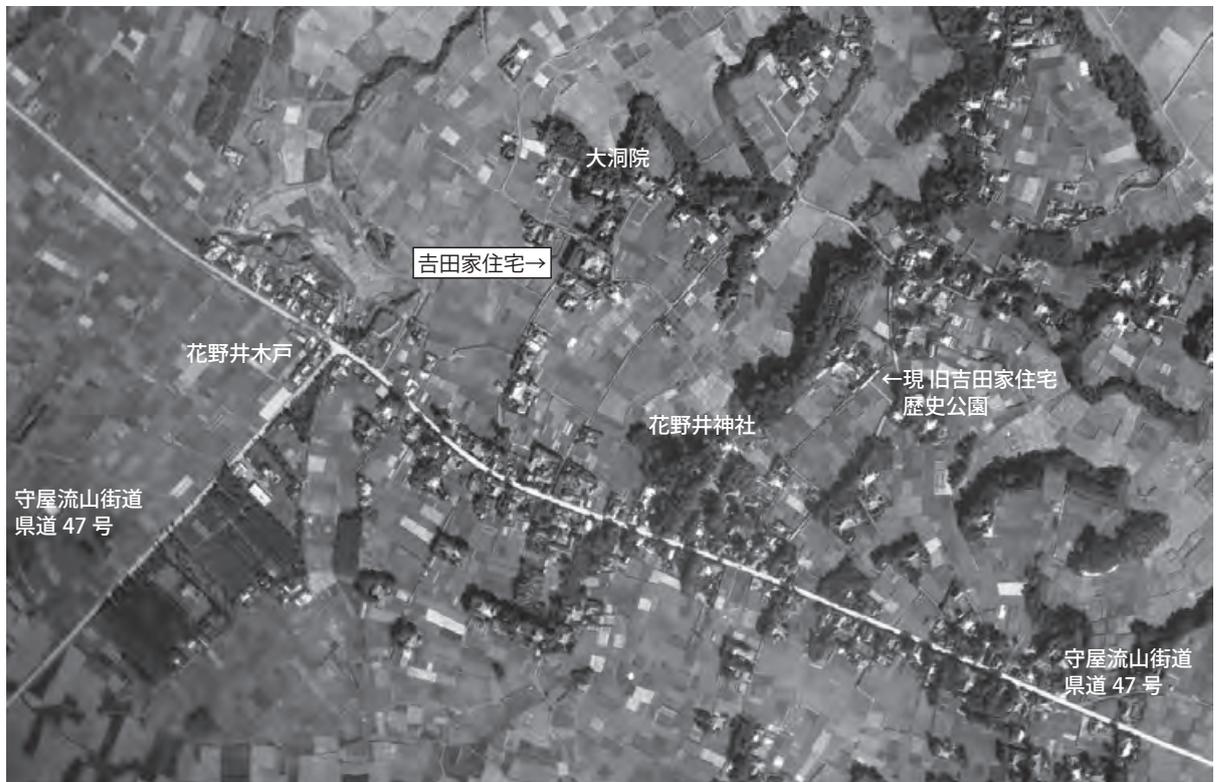
1972 年改造、2020 年解体

1 はじめに

吉田家住宅は、柏市花野井の古刹大洞院の門前に位置する。当寺の関係者より、近日建て替えのために取り壊される主屋が比較的古いことから、柏市教育委員会文化課に対して現地確認の依頼があったことが調査のきっかけとなった。

吉田家はかつて染め物屋を営み「ソメヤさん」として知られ、屋号を「三」としていた。大規模農園を経営する現在となっても地元ではこの名で通る。染めの作業は、工場の位置にあった井戸の水を利用して主屋の東側—現在の工場と倉庫のあたり—にあったクラで行われたと伝わる。

当家の登記簿には主屋は明治 30 年（1897）築であることが記載されていること、及び当初茅葺だった屋根は昭和 47 年（1972）に今日見る桧瓦葺に変えられたことを先に伺ったうえで、現地の調査を開始した。建物の特徴を把握すると同時に、建物に残る痕跡や写真史料に加え、当主への聞き取りから主屋の変遷に関する考察を行った。また、柏市市史編さん事業の史料収集の一環として、当家所蔵の古写真の整理が行われ、建物や環境、生活のわかる写真を提供いただいた。調査より判明した事項を、主屋の外観、室内及び解体中の写真を添えて、以下部屋及び部位ごとに記述し、記録する。



吉田家住宅の位置

街道から離れた場所にある農家は、東に正面を向けて配置されているのが特徴的である。

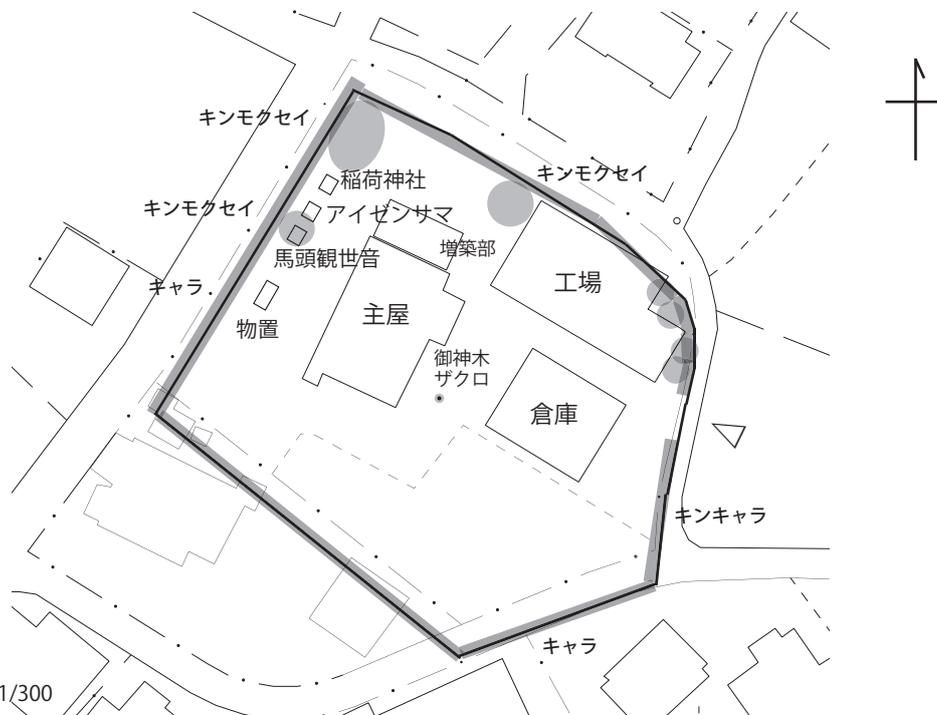
(国土地理院上空写真 1955 撮影 USA-M1226-72 を加工)

2019年度より柏市で実施している文化財保存活用地域計画策定のための建物悉皆調査を通して、昭和中期に柏市域では、大規模な住宅地開発のための農地の買い上げを契機に、主屋の建て替えや改造あるいは社寺の普請が盛んに行われたことが判明し、今回主屋で発見された修理時の札にある記載はこの社会的動向と合致する。

高度経済成長期の急激な家庭生活の変化に対応するように、吉田家住宅の主屋が改造された様子を、建物を通して把握することができた。特に、屋根を茅葺から桧瓦葺に変えた際の工事は、既存の構造を最大限再利用できるように工夫を凝らして計画されたことがわかる。この調査記録は個別の事例であるものの、広く見られる農家住宅の現代化の過程を示す典型でもある。

柏市域を含めた全国的な傾向として、昭和中期以降に建築された農家の中には、本主屋が改造を重ねてきたかたちで新築されたものも見られることが、明らかになっている。

なお、昔の部屋名は伝わっていないため千葉県北西部で一般的に用いられる名称をここでは使用する。主屋は調査の後、建て替えのために取り壊された。



御神木のザクロの木は主屋建て替え時に残された。



現倉庫の位置にあった土蔵 2011年に取り壊し。
 主屋南側には多数のクラがあったと言う。

2 建物の特徴

2-1 概要

木造、寄せ棟造、棧瓦葺、平屋の主屋は、東側にある屋敷地への出入口から奥まった位置に東を向いて立つ。平面は梁間 5.5 間・桁行 8.5 間と大規模で、当初の屋根は茅葺、屋敷地周囲の北と西は高垣で囲まれていた。花野井地区の街道北側の農家の多くでは、主屋の正面を東向きに建てて屋敷林を巡らす形式をとるのが特徴的である。当家は屋敷地においてライスセンターを営み、大型の設備類を備えるために先代の時代から専用の工場や倉庫を建ててきており、主屋以外は現代の建物である。かつては土蔵が複数棟あったという。

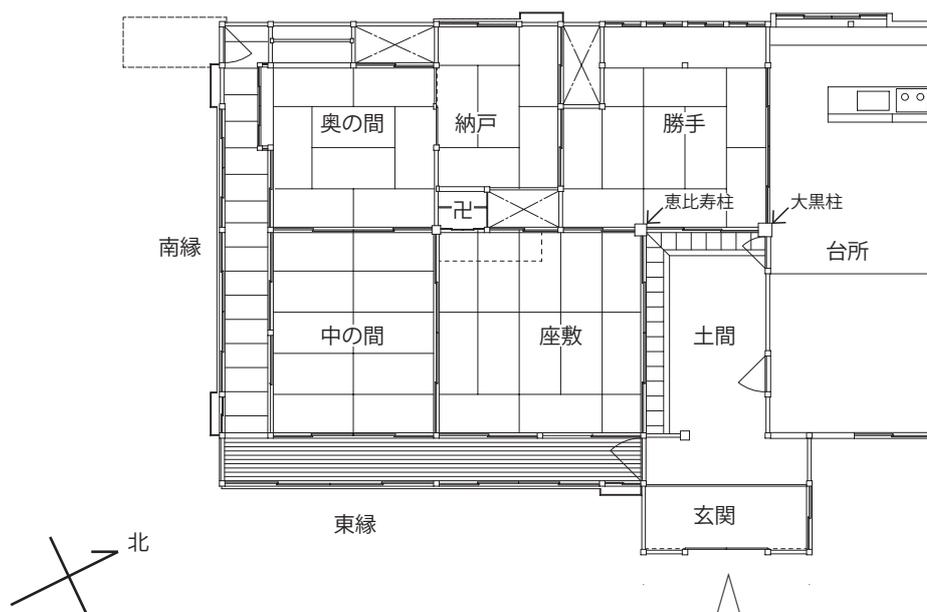
2-2 平面

正面側では、下手の土間・台所から南に向かって座敷・中の間が並び、背面側では同じく勝手・納戸・中の間の奥にあたる位置に上の間が配置される。台所南側の突出玄関から主屋に出入りする。主屋北側に 2 階建の住宅が、昭和 40 年代に増築されている。

正面側と背面側の部屋境の通り、台所と玄関・勝手の角の交点に大黒柱（断面 300 ミリ角、檜材）、この 1 間半南に第 2 大黒柱（恵比寿柱）（断面 262 ミリ角、檜材）を立てる。他の標準的な柱の断面寸法は、118 ミリ（3.9 寸）角である。室内の内法高（敷居 - 鴨居間の高さ）は、5.7 尺である。

土間・玄関 土間は当初 L 字型で、下図に「土間」と「台所」と記す範囲を占める。この北側の間口 2 間、奥行 5 間に床を張り、台所として使用する。

現在は床が張られた土間の前方に玄関を突き出す。土間から居室への小上がり（居室床高より 180 ミリ低い）が残されている。天井は根太天井。勝手境には千本障子、座敷境には中央に障子を張った



現況 平面図・部屋名称図

板戸を建て込む。

座敷 ドマの南隣は 12 畳半の畳敷きの座敷で、西壁では 2.5 間の間に南から仏壇（間口 4.2 尺）・押入（同 4.8 尺）・勝手への出入口（同 6.0 尺）を並べる。仏壇と押入前の上方に神棚を設ける。

根太天井とし、天井に引き戸式の改め口があるものの、煙出しはない。天井四隅の換気口の天井裏には上端が口を開けた木製の四角錐を嵌め、上部には埃除けの金網が張られている。同様の換気口は勝手にも見られる。これらは後述する火炉と併せて、養蚕に用いられた。

中の間 畳敷きの 10 畳で、座敷境に板戸、東と南の縁境に障子戸を建て込む。畳はいわゆる不祝儀敷きとなっている。畳の下の荒床は化粧仕上げの床板とし、座敷の床板同様に煤けていることから、通常は畳を敷かず利用されていたことがうかがえ、畳の敷き方も個々の畳の位置が限定されにくいように配慮されていた可能性が考えられる。（現在の畳裏面には位置を示す番付が打たれている。）

中の間—上の間境の欄間は蜀江文様を基本とする組子からなり、松が描かれた襖は比較的新しく、後設された納戸への出入口にも用いられていることより、古くとも昭和 40 年代のものと思われる。

奥の間 畳敷きの 8 畳間、敷目天井、聚楽壁（壁は白色、床内壁は緑がかった灰色）、長押を廻す。

各部屋の床

畳敷きの居室の畳を上げると、部屋ごとに仕様が異なり、かつての使用状況がうかがえる。この 3 部屋に手縫いの畳床が残る。

座敷： 鉋がけされた黒ずんだ床板、囲炉裏もあることから板敷きで利用されたことがわかる。
（別記する炉の写真を参照。）

次の間： 鉋がけされた黒ずんだ床板。特別な時に畳を敷いて使用か。

上の間： 手挽き鋸の加工痕の見られる荒床。当初から常時畳が敷かれていた。



中の間 手縫いの畳床



奥の間 手縫いの畳床



中の間 床板には鉋がかけられ、色合いから畳を敷かず使用されたことがわかる。



奥の間 畳の下の荒床（あらゆか）の表面には手曳き鋸による加工痕があり、常に畳が敷かれていたことがわかる。



正面 玄関 北東から見る。



側面 南から見る。



正面 南東から見る。 ザクロの古木の御神木は主屋建て替え時に残された。主屋背面にある稲荷神社はここにあった。



背面 南西から見る。壁上方には小屋組の梁小口が出ている。



主屋背面に立つ新小屋
便所の建物を転用。
右図画面右に屋根が見える。



キャラの生け垣に囲まれる屋敷地を西から見る。かつては高垣であった。



土間から座敷への上がり口を見る。



座敷 西壁を見る。



中の間から奥の間（左）と座敷（右）を見る。



中の間から奥の間を見る。



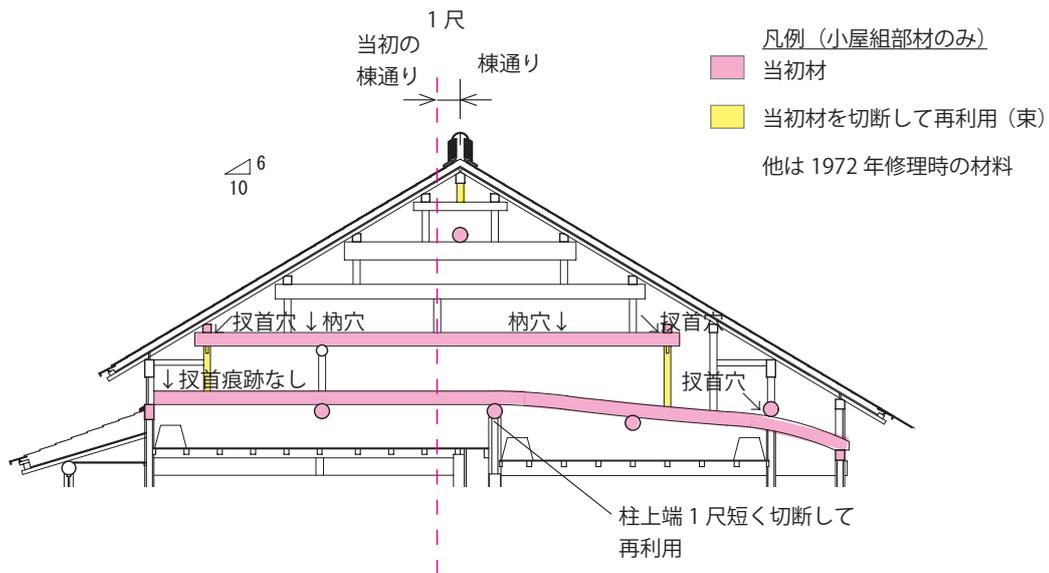
奥の間 床の間



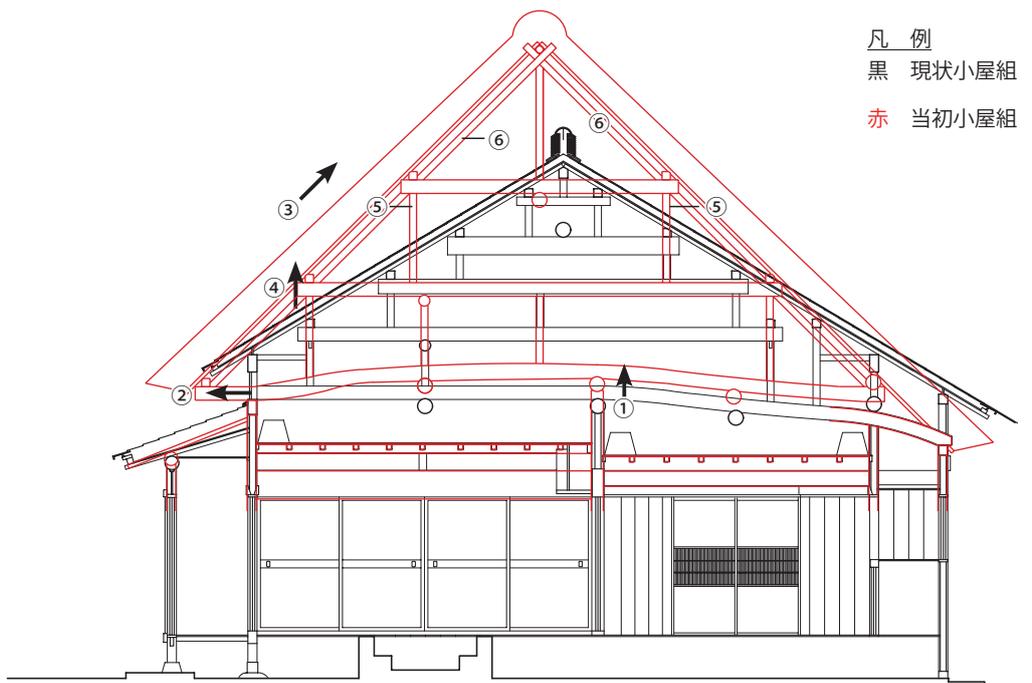
奥の間 床と付書院

小屋組の改造

3 変遷と復原考察 (p99) を参照。



現状小屋組（瓦葺）に見る当初小屋組（茅葺）の痕跡



- ① 大黒柱を1尺高くする。 根拠：大黒柱を切断した断片残存
- ② 正面にせがいを2尺出す。 根拠：現状と旧状の棟束の位置のずれは1尺
この先端で追扱首（おいざす）を受ける。
- ③ 矩勾配で屋根を架ける。 根拠：茅葺の一般的な形式
- ④ 小屋梁を屋根にぶつかる高さまで上げる。 根拠：切り縮めた小屋束にのっていた。
- ⑤ 小屋梁に束を立てる。
- ⑥ 茅葺屋根の構成部材である扱首（さす）を架ける。

現状小屋組（瓦葺）から当初小屋組（茅葺）を復原する手順



切断された第2大黒柱
切り口の墨書

「 祝 上 棟
十月参拾壹日
昭和四拾七年
」

上端を1尺切断された第2大黒柱。
各面に使用されていない貫穴がある。



梁の先端にある現在使われていない扱首（さす）穴を
追うことで茅葺屋根の構造がわかった。



大黒柱の天井裏には、昭和47年の修理で切断した大黒柱と
第2大黒柱の上端と札箱が置かれていた。奥に天井換気口。



柱の上端を切り縮め、曲がった木材からなる小屋組の位置を
ずらして再利用している。



新設された桁を繋ぐ部材や野垂木・野地板が新しくされた。
土壁の取り付く梁を含む下方の梁組は再利用された。



新材で瓦葺のための小屋組を設けた。棟木を支える部材には
「棟束」と記す。煤けた棟束は当初材を再利用したもの。



小屋組下方では、既存部材をもとの組み合わせのまま用いる。



東縁 縁桁は長尺材の杉丸太。化粧合板の敷目天井、欄間は葉の模様の型押しガラス。



南縁 縁桁は長尺材の杉丸太。化粧軒裏、欄間には格子建具に磨りガラス。



東縁 濡れ縁が室内化され、切目縁は縁甲板張りに変更。



奥の間 付書院の欄間と障子 欄間は麻の葉、障子は蜀江(しよっこう)文様と縦棧からなる。



座敷一中的間境の板戸 座敷から見る。



中の間一奥の間境の欄間 蜀江(しよっこう)文様の組子からなる。



土間一座敷境の板戸 土間から見る。



土間一勝手境の千本格子の建具 土間から見る。

火炉

座敷の畳を持ち上げたところ、部屋のほぼ中央に囲炉裏があり、内部に灰と炭がわずかながら残されていた。大きさは横 68 センチ×縦 1,460 センチ（枠の外寸）と縦長で、壁土で造られた炉の内側に瓦を張り、炉の両端では床を一段高くする。さらに炉の蓋は中央部が厚板であるのに対して、両端には格子状の蓋が設けられていた。また、この中央の 2 枚は開けやすいように指を入れる切り込みが付けられている。

この特殊な構造は、この主屋の建てられた明治時代中期に、養蚕を行う蚕室用に農務局蚕業試験場（現東京都北区西ヶ原にあった。）で考案された。中央で炭を焼き、鉄板張りの中央部からは輻射熱として、両脇の格子状の蓋のところから暖められた空気を放出することによって、室内全体を暖めやすく設計されている。吉田家の炉中央部の蓋は鉄板張りになっておらず、改造された痕跡はなく、周囲の床板と蓋の木材が同時代であることから、西ヶ原式火炉を部分的に踏襲して造られたと言える。

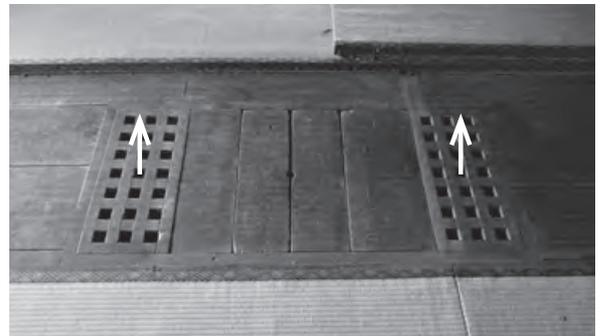
すなわち、前述の天井に設けられた換気口とあわせて養蚕を行うことのできる装置が備え付けられた農家として設計されたことがわかる。さらには主屋前で出荷前の繭を選別する家族の姿が見られることから、この主屋あるいは敷地内の建物で、養蚕が行われていた時代があることが判明した。

（註 1972 年撮影の屋根修理上棟式の写真には織機が写り込んでいる。）

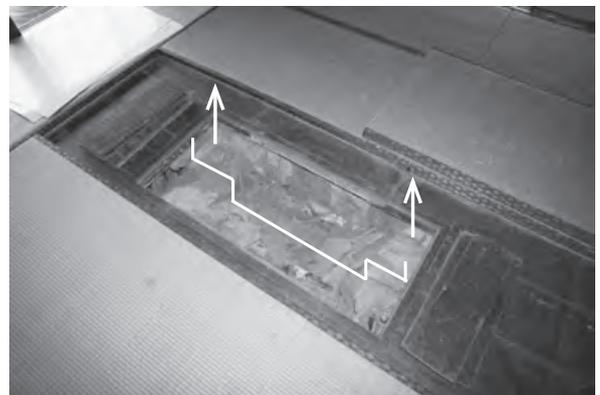
西ヶ原式火炉の参考文献： 吉池慶正『蚕糸業全書 第3編 養蚕編』博文館、1894-95 / 上木村九蔵『蚕飼の鑑』1900（『明治農業全集 第九巻 養蚕・養蜂・養魚』社団法人農山漁村文化協会、1983 所収 / 望月関馬『養蚕新論』博文館、1903



座敷 畳の下に発見された囲炉裏は、養蚕用に開発された効率の良い火炉の形式



両脇の格子から熱（↑）が放出される。



囲炉裏の床面は両端が高くされ、中央で焚く火の熱が部屋に広まりやすい構造になっている。内部の模式図を白線で示す。

上の間の荒床には手挽き鋸の加工痕が見られ、常に畳を敷きつめて利用するように造られている。前述した中の間とは対照的である。縁境には下り壁と障子戸、北壁の中央西寄りに納戸に入る絵襖の引き込み戸の出入口がある。

・床の間 間口3尺・奥行2尺の床、床柱は杉、落とし掛けと床框は檜。床脇はなく、押入とする。(内張りされており、違い棚などが備え付けられた床脇の痕跡の有無は未調査)。

・付書院 造作は檜材からなる。欄間は麻の葉、障子には蜀江文様を取り入れている。

縁 南縁の幅は3.5尺、檜材の厚板からなる切目縁、隣合う板の間に比較的大きな隙間があり、細い木材で埋められている。化粧屋根裏、縁桁は杉磨き丸太、外廻りには格子欄間に磨りガラス。側廻りはアルミサッシ戸、雨戸。西端に便所が取り付く(未調査)。

東縁の幅は幅3.5尺、縁甲板敷き、竿縁天井、縁桁は杉磨き丸太、外廻りには磨りガラスの欄間(南縁と意匠が異なる)。側廻りはアルミサッシ戸、雨戸。

勝手 畳敷きの9畳半、根太天井。西壁下方に地袋を造り付け、この上方に窓を設ける。土間境は障子戸、納戸境は中央に障子を入れた板戸。

納戸 畳敷きの6畳間、竿縁天井、長押を廻す。西壁北寄りに隣室の勝手に押入を張り出す。

2-3 小屋組

小屋組は扱首組からなり、松材で構成される。桁行梁をほぼ桁高及びこれより高い位置に1段架け、1間ごとに梁と桁行梁を松材からなる曲がり材を編むように組み合わせて、最下層の梁組を構成する。多くの梁は丸太で、中にはウリ剥きされたものもある。小屋東表面には、ヨキではつった跡が見られる。

竈の煙による煤けは、土間(現台所)の上方の木部や壁に確認できる。屋根の中には居室部への煙除けの土壁はないが、屋根葺替時に撤去されたものと思われる(この痕跡は未調査)。

番付墨書 小屋組に記された番付を整理したところ、当初建築時には主屋北東隅(土間正面の北端)を「いー」とする組合せ番付が振られたことが判明した。(章末の復原平面図参照)。



納戸 座敷の仏壇と押入の裏側が見える。南壁(画面右)から奥の間に入りできるように改造された。



勝手 南壁より納戸に入る。西壁では押入を改造して地袋とする。

3 変遷と復原考察

1972年時の屋根葺替工事が、主屋の現況から読みとれる最も大きな変更であった。屋根葺材の変更による小屋組の改造に伴い、平面にも手が加えられた。当家の所蔵する写真の中から、主屋の写り込むものを選び出し、現在の建物と比較することで旧状の概要を把握することができた。さらには、主屋自体にも改造の経緯を読みとれる痕跡が見られた。多くの柱では改造の跡を隠すように、柱の表面に薄い板が張られていたが、これらの一部を取り外すことによって、痕跡を確認した。

3-1 昭和の改修

昭和47年（1972）に大規模な修理が行われ、主屋は現在見る姿となった。

この上棟時の写真には、式台玄関と正面の縁が改造される前の姿で写る。屋根の構造を一新して勾配を緩くし、野地板の上にはルーフィングが張られている。茅葺屋根の撤去～小屋組の改造～瓦葺への変更を先に実施し、その後に木部の改造が行われたことがわかる。式台玄関と縁の屋根（庇）は分かれています、式台玄関の方が少し高く、瓦の割り付けも小さく、葺き足も短かったように見える。

小屋裏の土間境大黒柱直上の天井に置かれた煤けた箱の中には、この工事の際に書かれた札が納められており、主屋は明治27年（1894）に建築されたとある。明治時代の史料は確認されていないものの、昭和修理の折には現存した棟札等の史料に記載された内容を、書き写したと考えられる。

この札は、寺や神社によって作成されたものではなく、内容から当時の当主吉田富蔵によるものと思われる。片面には家族の名前が記されており（原文は縦書き）、2人の子供の名前を年齢順に、次いで両親（当主の息子と嫁）、妻が並ぶ。

昭和47年札 墨書書き下し

表

本家建築 吉田富蔵建之

祝上棟 明治二十七年 大工当村吉田利右エ門

改築 昭和四十七年十一月着工

土地田地番域面三及五畝歩当村開発ノ為坪当一万円

ニテ売渡シ同時ニ墓場及倉庫家宅内神地整モ行ヒタリ

改築大工吉田利右エ門家正利ノ改

裏
(書き下しに続き柄を括弧書きで加筆)

吉田静子 (長女)

吉田順一 (長男)

吉田せん (母)

吉田 敏 (父)

吉田らく (敏の母)

昭和修理の史料



昭和 47 年（1972）の上棟式 茅葺屋根を瓦葺とするために小屋組が改造された。屋根葺替を終えた後に軒より下の工事が行われたことがわかる。画面右にこれから葺く瓦が積まれている。

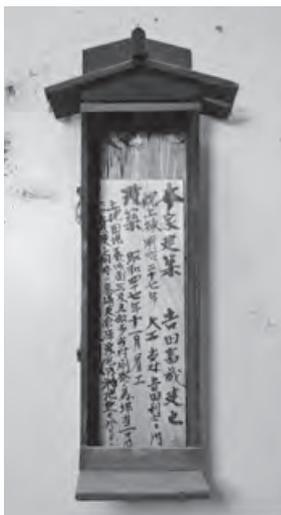


小屋組に打ち付けて残されていた幣串。
年号など修理の詳細を示す墨書はなかった。

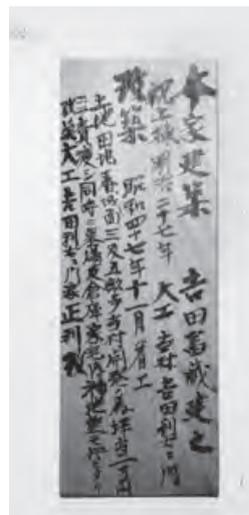


祝上棟
吉田家

幣串



天井裏で発見された札入の木箱
外部が煤けており、当初建築時のものと思われる。



札（表）
※ p99 の下し書き参照。



（裏）

3-1-1 茅葺から棧瓦葺へ

小屋組の改造 (p94, 95 参照)

今日の棧瓦葺屋根の小屋組には、時代差のある部材が確認できた。特に、天井近くの下方面では曲がりくねった梁が巧みに組み合わされ、上方の部材と比べると表面が黒ずんでいる。これらはヨキや手挽き鋸で加工されている。一方、小屋組の上方は帯鋸や丸鋸で機械製材された材木が規則正しく並び、表面は比較的明るい色合いながら、中には一部古い部材（以下「古材」と呼ぶ。）が混在していた。小屋組の構造と構成部材を実測し、各部材の状況を観察した結果、茅葺の小屋組の部材を部分的に再利用しながら、瓦葺に適した緩い勾配で屋根を架けるために工夫が凝らされたことがわかった。当初材の梁については、梁間方向（主屋の正面—背面方向）の移動はされていない。

茅葺の小屋組は、^{ます}扱首を用いて安定した三角形の構造をつくり、屋根面を 45 度の^{かね}矩勾配とするのが一般的である。古材の梁・小梁には、扱首先端の納まる穴が見られ、この構造であったことが確認できた。正面側で切断された梁端部には同様に扱首穴があったと考える。また、屋根の勾配を変更するだけでなく、背面の下屋を大屋根の中に取り込むために棟木の位置を正面寄りに移動する必要があった。

大黒柱の切断

前述の札が発見された場所には、大黒柱を含め柱の上端を切り落としたものが 2 片置かれていた。札の近くにあったので、昭和 47 年の修理時に発生した部材であることが想像できた。現在の大黒柱の上端に切断された跡が見られるか確認すべく、積もった土と埃をこすって落としたり、墨書が現れ「祝上棟 昭和四拾七年十月参拾壹日」と書かれていた。これで柱上端が切られたことが確実にになった。柱断片の長さ（梁に差し込まれる^{ほぞ}柄長さを除く）は、4.5 寸（大黒柱：300 ミリ角）と 4 寸（恵比寿柱：260 ミリ角）で、新しく作られた柄の長さ 6 寸との納まりから判断するともとの柱は現況より約 1 尺高かったことがわかった。

これほどの大工事をして梁の位置を低くしなくとも瓦葺への改造はできそうなのだが、瓦葺屋根に変更して軒を差し出すせがいをいなくなると、下屋の屋根面から桁の位置まで間延びして見えるのを避けたかったことが考えられる。

3-1-2 平面の改造

・式台玄関の撤去 (p104 参照)

古写真に見る中の間—東縁境には、引き違い戸の障子 4 枚が建て込まれ、両側に袖塀がある。障子戸の外側では、式台玄関に用いられる形式の^{まいらど}舞良戸 4 枚で戸締めしたと思われることから、建物に残る痕跡を調べた。

中の間正面側（東側）の柱の東面には、式台玄関が取り付けいた痕跡がある。中の間北東隅の柱 [い 13] の東面には袖壁が取り付けいたことを示す、土壁の貫及び間渡し穴が残る。一方、中の間南東隅の柱 [い 17] (写真③) の東面に痕跡はないものの、この南面には戸袋開口部（室内から建具を出し入れする小窓）が取り付けいた痕跡が縁側廻り柱 [い 18] (写真②) の北面と対で残り、[い 17] — [い

古写真に見る主屋の旧状

吉田家所蔵の写真の中から主屋の写るものから、建物に残る痕跡の裏づけが得られた。

写真はいずれも吉田家所蔵、撮影時期は不詳。(p100の1972年上棟時の写真を併せて参照。)

・式台玄関

低い腰付の障子戸4枚が建て込まれている。袖壁の南側戸袋の建具（舞良戸か）で戸締まり
主屋本体からの出は濡れ縁（3.5尺幅）より大きく、5尺ほどか。

袖壁は下方を豎板張りとする。

葺き足の短い棧瓦葺の庇を濡れ縁庇とは別にかける。両脇に風切り丸を2列ずつ葺く。

・正面濡れ縁

切目縁の縁板の間に隙間が見られ、現存する上手縁と同じ仕様。

建具は縁の外側（側廻り）に雨戸、内側の居室境に低い腰付障子戸（式台玄関と同じ）。

棧瓦葺になる前の写真で土間前まで続く庇は、鉄板葺のように見える。当初は板葺か。

・土間

正面には腰付ガラス戸が4枚建て込まれている。当初の上げ戸から変更されている。

差鴨居の下に低い欄間窓がある。

差鴨居が北東隅柱まで伸びる。この隅柱は断面が大きい。

この北側の壁は板張り（押さえ縁はない）。

・カマヤ

主屋下手に差し掛けでカマヤが取り付く。

東妻の主屋寄りに出入り口、この北側の壁には建具が建て掛けられているのか。

妻壁の一部は通気が得られるように、格子状になっている。

屋根は棧瓦葺か。



式台玄関前



式台玄関前



土間下手には差し掛けのカマヤが取り付け、
ここには風呂があった。



土間出入り口にはガラス戸。上手側に袖塀。
既に上げ戸はなく、出入口の間口は拡張され
ガラス戸に取り替えられている。



七五三の集合写真 土間前の庇は板葺か。後年瓦葺になる。
画面左端に稲荷神社が写る。

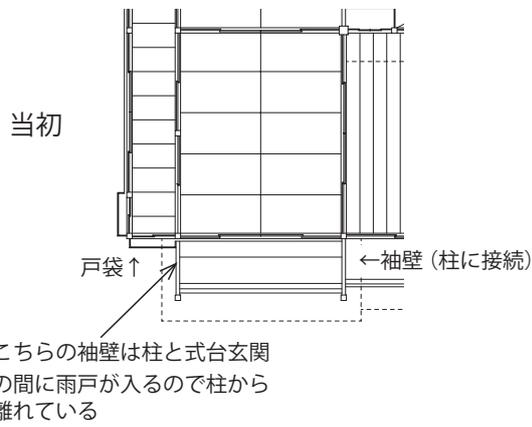
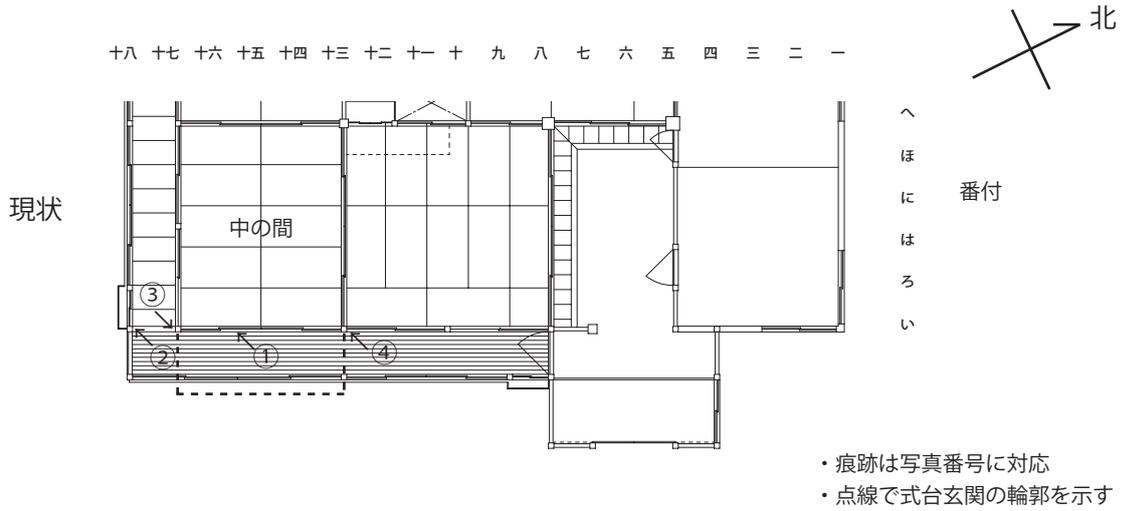


座敷前の東縁は幅広の板を並べる切目縁（きりめえん）。
庇は栈瓦葺、縁境は障子戸、室内は畳敷き。



土間出入り口前で出荷前の繭を選別している。

式台玄関の痕跡



① 中の間一東縁境の差鴨居外側には、式台玄関の鴨居痕跡が見られる。画面左側に②③に見る戸袋が付くので、③の柱に袖壁の痕跡はない。



② 式台玄関戸袋内側の壁の痕跡(南壁北面)



③ 式台玄関戸袋内側の壁の痕跡(南面)。②に対となる痕跡



④ 式台玄関袖壁の土壁が取り付いた痕跡

18] 間に戸袋があったことがわかった。すなわち、式台玄関の控え壁は、南側では一本溝の敷居と鴨居を挟んでこの外側に設けられた柱に取り付く構造になっていた。

また、[い 13] — [い 17] (写真③) 間の 2 本の溝の差鴨居東面下方には鴨居の取り付く溝があり、現在障子戸の建て込まれた 2 本溝の敷居は取り替えられているが、この外側に敷居を切り落とした痕跡があり、対になる一本溝の鴨居と敷居があったことがわかり、ここに建て込まれた舞良戸が袖壁の南側にある戸袋に引き込まれる形式であったことが判明した。

・東縁の増築と南縁の延長

南縁の東端部半間（東縁の北の突き当たり）には当初は縁がなく、ここの縁桁は半間分継ぎ足されている。式台玄関戸袋のあった壁 [い 17] — [い 18] を貫いて東縁が通され、東縁全長に及ぶ一本ものの杉丸太の縁桁が入られた。

・東縁の室内化

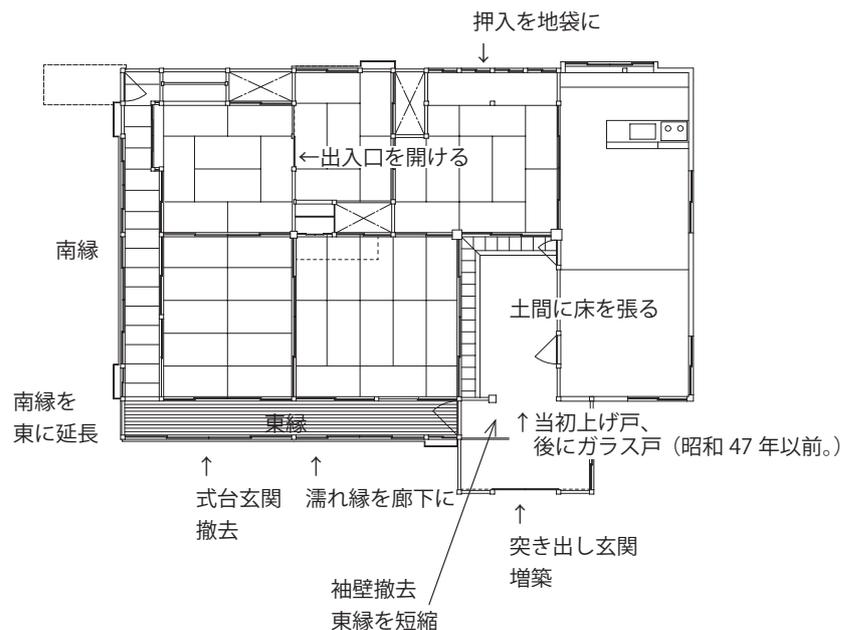
現在廊下となっている正面側（東面）には、開放された濡れ縁があった。外側に雨戸を建て込み、下手に戸袋が取り付けいた。古写真から縁板は切目縁であったことがわかる。現在の南縁は檜材の切目縁からなり、隣り合う板の間に比較的大きな隙間があることを前述したが、東縁の縁板も同様に間に隙間が見られる。雨水がたまらないための配慮と思われる。（この縁板に外向きに勾配をつけられていたか否かは未確認。）

・勝手西壁 押入を地袋に改造し、採光が得られるように窓が新設された。

・上の間 - 納戸境 両部屋間の行き来ができるように半間幅の引き戸が新設された。

・突き出し玄関の増築

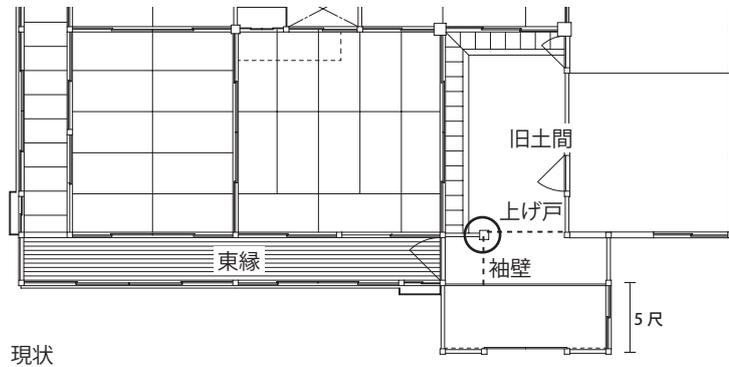
土間にあった下手の出入口の代わりとなる玄関が増築された。東縁の外側からさらに 5 尺手前に壁を突き出し、広い叩きと上がり口が設けられた。土間からの小上がりを残し、これより少し低い位



現状平面に見る改造箇所

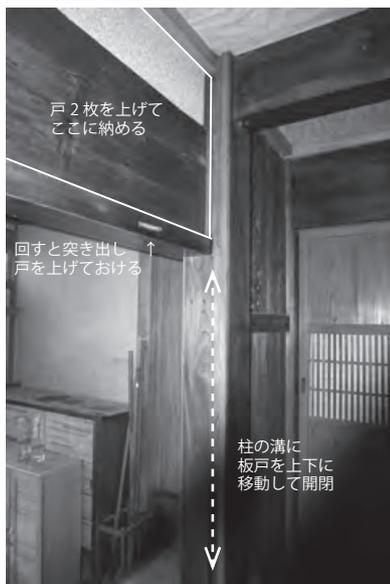
置に床を張る。古写真より、この改造の前に既に土間出入口は引違のガラス戸に改められていたことがわかる。下図に○で示す柱には、当初の土間出入口上げ戸と東縁袖壁の痕跡が見られる。

土間廻りの痕跡



現状

土間出入口上げ戸



内側には上げ戸が建て込まれていた跡がある。

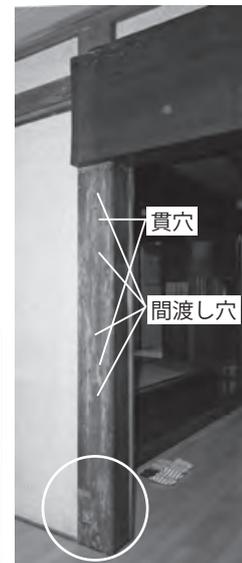


玄関にある当初の土間出入口には差鴨居が残る。
内側に上げ戸の取り付け痕跡

東縁袖壁



東縁北壁足元の痕跡
左図の柱の玄関側



柱側面に土壁の跡



台所北東角。ペンキ塗された土間の差鴨居が室内
(左図) から続く。隅柱が番付の起点となる「いー」

石造物



キンモクセイの木に囲まれた馬頭観世音・アイゼンサマ・稲荷神社（画面左から）かつては13の「神様」を敷地内に祀っていたという。



馬頭観世音・アイゼンサマ・稲荷神社の基壇は同時代に製作されている。かつて稲荷神社は主屋正面の御神木脇にあった。稲荷神社の木造覆い屋の形式や風化具合からは50年ほど前の建築と思われる。主屋を修理した1970年代初期に移設か。



稲荷神社
石鳥居陰刻「平成十一年二月初午建立 順一 智恵子」
前身の鳥居は赤色であった。



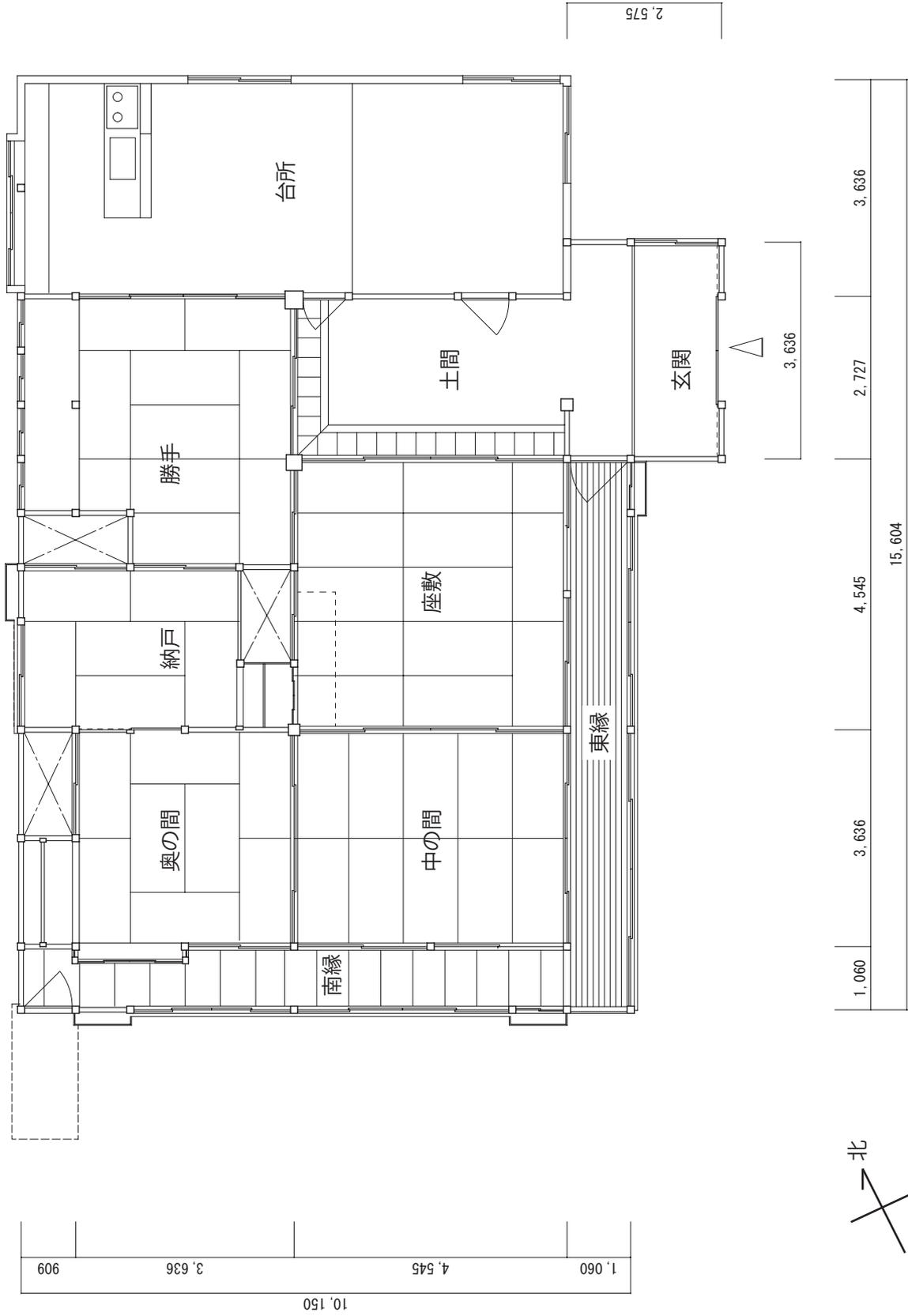
馬頭観世音
(正面右) 明治四十五年
(正面左) [判読できず]
(右面) 花野井 吉田増五郎



アイゼンサマ
(正面) [判読できず]
(左面) 妙観□□
(右面) 明治四十五年
一月廿五日□□
花野井 吉田増五郎



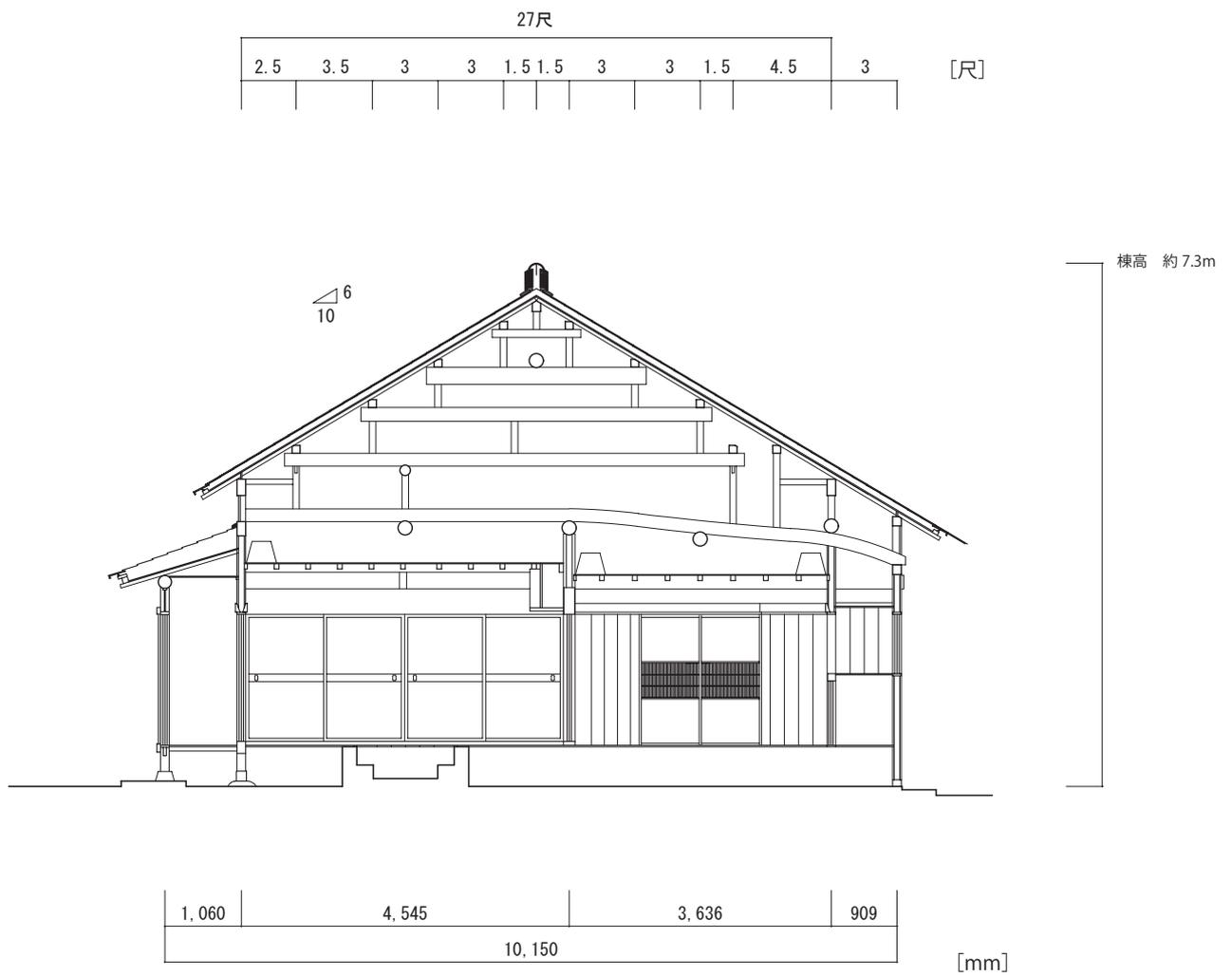
稲荷神社
(左面) 吉田三之助
(右面) 大正十一年十一月



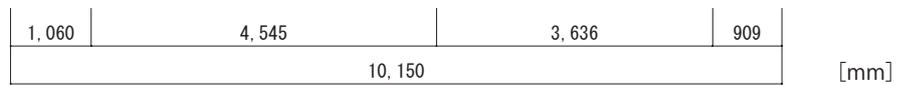
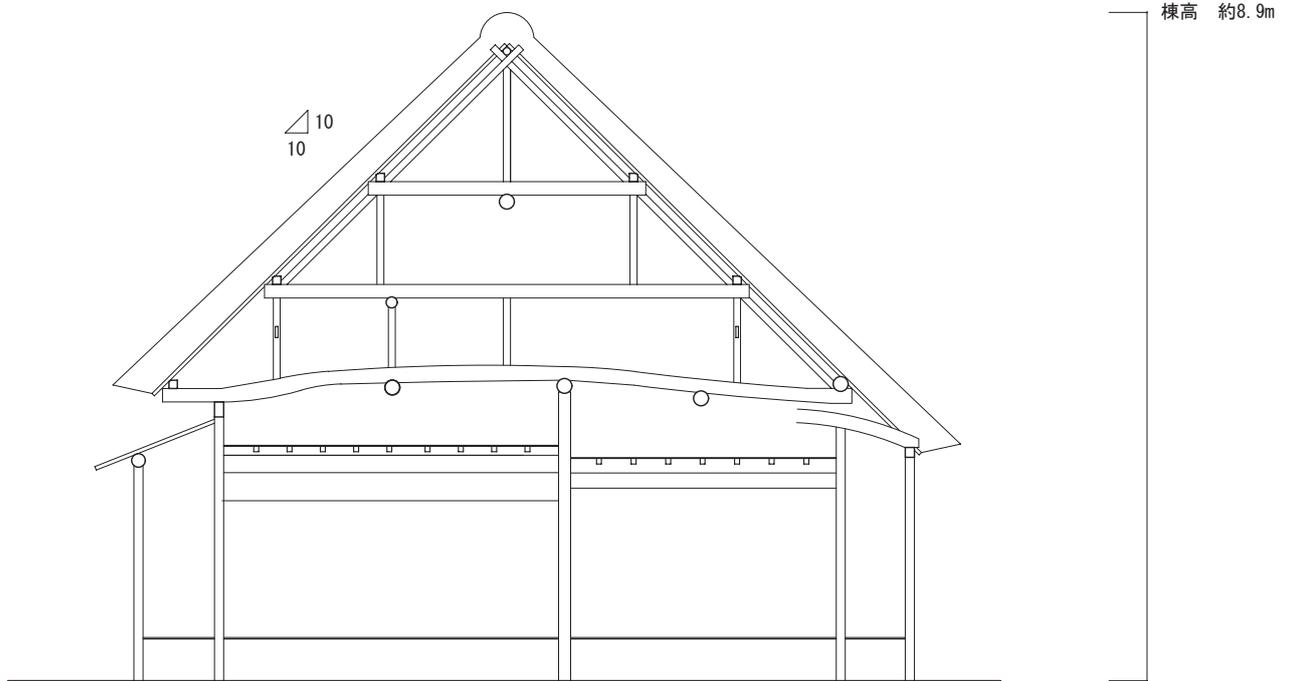
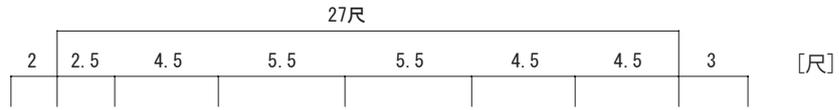
現状 平面図
 部屋名称図
 s=1/100

い る は に ほ く と ち り ぬ る





現状 梁間断面図
s=1/100



復原 梁間断面模式図
s=1/100

柏の歴史ある建物

柏市建造物調査報告書 4

発行 2021年9月30日

発行 柏市教育委員会
生涯学習部文化課
千葉県柏市大島田48番地1

印刷 株式会社精興社

